

れたる才能有りて」となつてゐる本もある。意は同じである。○此の人の後—この人の死んでしまつた後○誰にかとはん—誰に尋ねようか、誰といつて尋ね問ふべき權威者もなくなつてしまふの意○いはるは—世間の人から、さういはれるのは○老のかたうど—「かたうど」は方人であつて、味方とか仲間とかいふ意。「老」は老人仲間。老人の味方といふことであるが、更に進んで、ここでは、つまり、老人の味方をしてくれ、我我老人仲間のために萬丈の氣焔をあげてくれるものであるといふ意になる○いけるもいたづらならず—生きてゐてもむだなことではないの意。老いて生きながらへてゐても、それだけの價値があるといふ意○すたれたる所—廢れた所。老いて、よぼよぼして技が衰へてしまふことをいふ○一生此の事にて暮れにけり—その人の一生涯は、この事へつまり、その人の藝能—だけで過してしまつたの意○つたなく見ゆ—「つたなし」は拙しでつまらない意。つまらなく思はれる○今はわすれにけり—たとへ自分は知つてゐたにしても、年寄りの冷水で、でしやばつたりなどせず—今はもう忘れてしまつて」とか何とかいつてゐる方が、はるかに耳ざりがよいといふのである○大方はしりたりとも—大體のことは知つてゐるとしても○すずるに—むやみと。やたらに○いひちらす—言ひ散らす。喋り散らすこと○さばかりの才にはあらぬにやときこえ—大した才能ではないのかしらと思はれるの意○おのづから—自然と○さだかにも—はつきりとは○辨へしらす—そのことについて詳しく知つてゐない○なほ—なんといつてもやつぱり○道のあるじ—その道の大家○したりがほに—得意な様子で○おとなしく—身分も立派であり、年配も相當である人のこと○もどきぬべくもあらぬ人—「もどく」は非難すること。非難

附け、又それに、今少し太きを附けて、あなたの口に、蜜を塗つて見よ」と云ひければ、然申して、蜜を入れたりけるに、蜜の香を嗅ぎて、誠にいと疾う、穴の口に出でにけり。偕、其の絲の貫ぬかれたるを遣はしたりける後になむ、なほ日本は賢かりけりとて、後後は然る事もせざりけり。此の中將をいみじき人に思し召して、帝「何事をし、如何なる位をか賜ふべき」と仰せられければ、中將「更に官位をも賜はらじ。只老いたる父母の隠れ失せて侍るを尋ねて、都に住ますることを許させ給へ」と申しければ、いみじう易き事とて許されにければ、萬づの人の親之を聞き、喜ぶ事いみじ

しようと思つても非難できない人の意である○さもあらずと云云—自分では、「あんなことをいつてゐるが、あれはちがつてゐる」と思つて、しかし、それを口に出すには、相手が「大人しく、非難するにも出来ないほどの」偉い人であるので、黙つて聞いてゐるといふのは意○わびし—つらいことだの意。

かりけり。中將は大匠までになさせ給ひてなむありける(枕草子二百三段)

【第百十七段】

さしたる事なくて人のがりゆくは、よからぬ事なり。用有りて行きたりとも、其の事はてなば、とく歸るべし。久しく居たる、いとむづかし。

人とむかひたれば、詞おほく、身も草臥れ、心も閑かならず、萬の事ははりて時をうつす。たがひのため益なし。いとほしげにいはんもわろし。心づきなき事あらん折は、なかなかそのよしをもいひてん。おなじ心にむかはまほしく思はん人の、つれづれにて、「いましばし。けふは、心閑かに」などいはんは、此の限りにはあらざるべし。阮籍が青き眼、誰も有るべきことなり。

【参考】

○久しく居たる「居たる」は連體形故、其の下に「事は」を補つて解す「後の物」がたりしてかへりぬるも、下に「事は」を補つて見よ。

○阮籍が青き眼 この話は晉書の阮籍傳に、「阮籍字は嗣宗。陳留尉氏の人なり。禮教に拘らず、能く青白眼を爲す。禮俗の士を見れば白眼を以て之に對す。嵇喜來り弔するに及びて、籍白眼をなす。喜懼はずして退く。喜の弟康之を聞き、乃ち酒を

其のこととなき人に人の來りて、のどかに物がたりしてかへりぬる、いとよし。又文も、「久しくきこえさせねば」などばかりいひおこせたる、いとうれし。

【口譯】 大した用事がないのに、人の所へ行くのは、よくない事である。又、たとへ用があつて行つたにしても、その用事が終つたならば、急いで歸るがよい。いつまでも人の所に長居をしてゐるのは、まことにうるさいものである。一體、他人と對して坐つてゐれば、自然と言葉も多くなり、身體もくたびれるし、精神ものんびりとしないうで、萬事につけて、さしきはりができ、時間を無駄に過してしまふ。こんな事はお互ひのために、何の利益もないことである。さうだからといって、相手の人に對して、いやいやらしく話しをするのもよくないことである。氣乗りのしない時には、かへつて、その理由を打開けて實際を云つた方がよいだらう。尤も、氣が合つていつまでも對談してゐたく思ふやうな人がこちらが訪ねて行つた時、其の人が退屈の折で其の人が「もう少し居て下さい今日は、ひとつゆつくり遊んでいつて下さい」といふやうな場合は、例外で長居してもよからう。昔晉の時代の阮籍が、氣に入つた客が來れば青眼を以て迎へ（氣に入らぬ客が來れば白眼を以て迎へた）たといふ

齋し琴を、（た）みて造る。籍大いに喜び、乃ち青眼もて見る。是に由つて禮法の士之を疾むこと誓ひの如し」と出てゐる。嵇康は竹林の七賢の一人。○人とむかひたれば、對坐してゐるから、これを對坐するならば」としては不可である。已然形の下に「ば」が有るので、確定である。

○そのよしを云ひてん「云ひてん」は「云はん」の意（「て」は完了助動詞のテ）。即ち「云つた方がよい」の意。

○さしたる事なくて云云 急ぐ事ある折に、長言する賓客。あなづらはしき人ならば「のちに」など云ひても追ひやりつべけれども、流石に心馳づかしき人、いとにくし（枕

ことであるが、誰にも、こんな事はあるのである。又、これに反して別に用はなく、何とはなしに客がやつて來て、のんびりと物語などして歸つて行くといふやうなのは、これは誠に（趣味の上から考へると）先とは矛盾らしいがよいものである。又、手紙などにしても、「永らく御無沙汰致しましたので御手紙を斯う上げました」などいふやうなことだけをいつてよこしたのは、（受取つた方でも）有難いものである。

【摘解】 ○さしたる事なくて—これといつて大した用事もないのに○人のがり—人の許へ「人がり」ともいふ○はてなば—果てたならば。用事がすんだならば○とく—疾く。早く○久しく居たる—いつまでもいつまでも居るといふは○いとむづかし—非常に「むづかし」。「むづかし」はうるさい。うつとうしい○むかひたれば—對坐してゐるのだから○詞多く—自然無駄な話などもするやうになる○身も草臥れ—身體も疲勞する○心も閑かならず—肉體が疲勞するばかりでなく、精神ものんびりとしないうこと○萬の事ははりて—「さはりて」は差支の生ずること。萬事、いろいろと差支が生じて○時をうつす—時間を無駄に過す。この次に「かかることどもは」といふやうな言葉を補つて考へるがよい○たがひのため—主人も客も、相手の身にとつて○益なし—利益がない○いとはしげに—いやいやらしく○いはんもわるし—話し合つてゐるのはよくない○心づきなき事—氣乗りがしない事。相手をして話をするのに感興を生じないこと○なかなか—かへつて。厭さうな顔をしてゐるよりはいつそのこと○そのよし—その理由。氣乗りのしない理由○いひてん—言ふがよい

草子第二十四段

○さるべき節會など、五月の節に急ぎ參る朝、何のあやめも思ひ静められぬに、得ならぬ根を引き掛け、九日の宴に先づ難き詩の心を思ひめぐらし、暇なき折に、菊の露をかこち寄せなどやうのつきなき營みに合はせ、さなからでもおのづから、げに後に思へば、をかしくも哀れにも有んべかりける事、其の折につきなく、目にも留まらぬなどを、推し量らず詠み出でたる、なかなか心おくれで見ゆ。よろづの事に、なかはさてもと覺ゆる折から時時、思ひわかぬばかりの心にては、よしばみ情立たざらむなむやすかるべき（源氏物語、帚木）○思ふどちまとおせる夜は

○おなじ心にむかはまほしく思はん人—同じ心で即ち、気がよく合つて、「いつまでも向かひあつてゐたいやうに思はれる人」○つれづれにて—徒然にて。其の人が退屈で困つてゐるやうな折などに自分が訪問して○いましばし—今少し。これは先方の主人公の言葉である○此の限りに—例外であらうの意。つまり、さういふ人のところへ自分がたづねて行つた時には、急いで歸らなければならぬといふのではないといふ意○阮籍—支那の晉時代の隱士○青き眼—阮籍は、自分に氣に入りの客が来た時は青眼を以て之を迎へ、自分に氣に入らない客が来た時は、白眼を以て之を迎へたといふ故事がある。それを引用したのである。強ひて譯せば、ここに顔で迎へる時の眼をいふ○其のことなきに—何といつて、これといふ用事もないのに○のどかに—ゆつたりと落着いた心で○いとよし—非常によいものである○文—手紙○久しくきこえさせねば—永いこと何のたよりも差上げなかつたからしての意。「きこえさせ」は敬語の用法である○などばかり—などといふ閑文字だけを○いひおこせたる—いつてよこしたのは。

〔第百八十四段〕 相模の守時頼の母は松下の禪尼とぞ申しける。守を入れ申さるる事ありけるに、煤けたる明障子の破ればかりを禪尼手づから小刀して切り廻しつづ張られければ、兄人の城の介義景、その日の經營して候ひけるが、「賜

唐錦たたまく惜しきものにぞありける(古今集、雑歌上)
○出で行かむ人を留めむよし無きに隣の方に鼻もひぬかな(古今集、俳諧歌)
○心ある人のかしがましからぬが訪ね入り、此の住ひこそ羨しけれなど言ひ寄り、之は都の苞なりとてつくるはぬ物取出し、小さき杯して彼は半日の閑を得たり、之は忙しせりなど笑ひ合ひたるいとよし(とはすがたり)

【参考】
○某男—實際は本當の姓名をいつたのであるが、書きあらはす要がないから、ここにはナニガシといつてゐる。
○心得たる者—小氣の利いた、よく其の事をのみこんでゐる者の意。

はりて某男に張らせ候はん。さやうの事に心得たる者に候」と申されければ、

【口譯】 北條相模守時頼の母は松下禪尼とぞ申しした。相模守時頼を招待なされる事があつた時に、煤けたあかり障子の、破れた處ばかりを、禪尼が自分で小刀で、切り廻して悪い部分を去つて其處を障子張りされたから、禪尼の兄たる秋田城介義景が其の日の世話して居たが、「その仕事を私が貰ひ受けて、甲野乙兵衛(假名)に張らせませう。其の男はさういふ事には小氣の利いた者で御座います(あなたの様な貴いお方がなさるとは勿體なく、御身分柄にもかかはりますよ)、と申し上げたから、

【摘解】 ○相模の守時頼—北條第五代の執權○松下の禪尼—松下は鎌倉の地名。ここに邸があつた故名として呼ぶ。禪尼は女で佛門に入つた者。それが男ならば禪門といふ。禪宗の意味ではない○守—入れ—招待。およばれによぶ○煤け—アカリ障子—今の普通の障子。古は唐紙・衝立を障子といひ、今普通の障子といふものを明障子といつた○小刀—コガタナ○兄人—シヨウトと發音する「兄」の事。兄と人の音便ウトと合せてセウト(シヨウトと發音)とよむ○城の介義景—秋田城の第二等官たる介の、本名は安達義景○經營—ケイエイをケイメイと習慣上で讀む。世話をすること。

た、よく其の事をのみこんでゐる者の意。
○松下禪尼—北條時頼の母、秋田城の介安達景盛の女である。此の段の逸話で有名である。
○安達義景—安達景盛の子。世世鎌倉府に仕へた。嘉禎年中、父の職をついで秋田城の介と爲り從五位下に叙せられ評定衆となつた。四條帝崩じて嗣がなかつた。北條泰時は、義景を京師に遣はして後嵯峨帝を立てた。建長年中に病氣で薨髮して願智と法名をつけたが尋いで卒した。其の子供には、頼景・景村・泰盛・時盛・重盛・顯盛・長景・時景があつたが皆顯はれた。

「其の男、尼が細工によも勝り侍らじ」とて、なほ一間づつ張られけるを、義景「皆を張替候はんは、遙かにたやすく候べし。斑に候も見苦しくや」と重ねて申されければ、「尼も後はさわさわと張替へんと思へども、今日ばかりは、態と斯くてあるべきなり。物は破れたる所ばかりを修理して用ふる事ぞと若き人に見習はせて心づけん爲なり」と申されける。いと有難かりけり。

世を治むる道、儉約を本とす。女性なれども、聖人の心に通へり。天下を保つ程の人を子にて持たれける、誠に唯人にはあらざりけるとぞ。

【口譯】「其の甲野乙兵衛(假名)とて、此の尼(私)の切り張りする細工には、まさかまさつては居まい」と云つて、まだも、ひとわくづつを切り張りされたのを、義景は「全部を張替ますなら、ずつと易いでせう。切り張りはぶちになつて見苦しくなるかも知れせん」と重ねて尼に申

【参考】○申されける「ける」は文法上にては「けり」となるべきである。しかし「申されける(事は)いと有難かりけり」とも見られる。終りの「あらざりけるとぞ」の「ける」は「けり」とするが文法的である。

○物は破れ云云 貞永式目に「小破の時は、且く修理を加ふ」とあるのに尼の言は當る。

○聖人の心 孔子の心。論語「約を以て之を失ふ者は鮮し」「奢れば不孫なり、儉なれば固なり。其の不孫ならんよりは、寧る固なれ」とある。

○此の記事は大日本史には次の如く書いてある。北條時頼母安達氏。秋田城介景盛女也。稱松下

し上げますと、尼が「私も後になつたら、さつぱりと全部を張替へようと思ふが、今日だけはわざわざ斯うして置かねばならぬ。それは、物は破損した所だけを手入れて用ふることだと若い時頼に見習はせて、氣をつけさせるためである」と云はれました。甚だ珍しい心掛けの尼である。

天下をよく治める仕方は儉約をする事が根本である。女であるけれども、學徳圓滿な聖人の心と同様である。天下を持ちこたへるくらゐの執權時頼を子として持たれた人だけあつて、誠に普通の凡人ではないえらい人だと人人が噂した。

【摘解】○其の男○尼—禪尼自身をいふ○細工○一間—隙子の骨でかこまれた一わく○奥○尼も後は—私も後には○態○修理○若き人—時頼○有難かり—珍らしい○女性○通へり—同じだ○とぞ—下に「いふ」を略す。

【第百八十七段】 萬の道の人、たとひ不堪なりといへども、

堪能の非家の人にならぶ時、必ずまざる事は、たゆみなくつつしみて輕輕しくせぬと、ひとへに自由なるとのひとしからぬなり。藝能所作のみにあらず、大方のふるまひ、心

禪尼。實爲時頼設食。兄義景來助治具。尼方手我。小紙糊補紙格。義景請命人爲之。尼不顧。義景曰。補之不若新之之省勞。尼曰。我豈不之知乎。凡物有。小破。宜修補之。欲使兒輩知此意耳。人謂時頼克守勤儉。政理寧靜。亦母教之使然也。

○時頼の系譜
貞盛—時方—時家—時政—義時—泰時—時氏—時頼—時宗—貞時—高時

【参考】

○この節の主旨について 餘技として、例へば謡曲をやる人があるとして、その人は、いかに上手でも、専門の謡曲の家柄の人でまだ未熟な人と比較

づかひも、おろかにしてつつしめるは、得の本なり。たくみにしてほしきままなるは、失の本なり。

【口譯】すべて何の道によらず、その道にたづさはつてゐる人は、たとへまだ未熟であるとしても、上手ではあるがその道の専門家でない人と比較する時は、きつと立ちまさつてゐるのであるが、この事は、怠ることなく慎重に注意深くやつて輕輕しくしないといふ(専門家)のと、一途に勝手にやつてゐるといふ(専門家以外の人)のとの相違によるのである。これは藝術才能ばかりでなく、日常一般の行爲や、心掛けに於ても不器用でも一所懸命にするのは成功の根本であり、器用で勝手氣ままなのは失敗の本である。

【摘解】○萬の道—武術であらうと、歌道であらうと、又音楽であらうと、何にまれ、一つの學ぶべき道を總稱していつた○人—その道の専門に修業してゐる家柄の人○不堪—堪能の反對。未熟。下手○堪能—上手。名手○非家—その道の専門の家柄でない人○ならぶ—立並ぶ事。比べる○たゆみなくつつしみて—怠ることなく氣をつけてゐること。つつしみ—は慎重であること○輕輕しくせぬ—その道を尊重して、輕率なことをしない○ひとへに—全く。一途に○自由なる—氣まま勝手であること○ひとしからぬなり—同じでないのによる○藝能—技能や技術をすべてひ

すると、一方は、家の教へや傳統を尊重して、一心不亂に勵むのであるに對し、一方は、どこかそれだけの熱心がないからして、やはり何といつても、素人藝の域を離れないといふことを述べて、一般、處世上の心得もかくあるべきを論じたのである。

○繪所に上手多く、更に劣り優れるけじめふとしも見え分れず。かかれど、人の見及ばぬ蓬萊の山、荒海の怒れる魚の姿、唐國のはげしき獸の形、目に見えぬ鬼の顔などおどるおどろしく作りたるものは心に任せて、一きは人の目を驚かして、實には似ざらめど、さてありぬべし。世の常の山のたたずまひ。水の流、目に近き人の家居有様、げに

つくるめていふ言葉○所作—「しわざ」。ここでは、上の藝能についてゐる言葉で、大して深い意味なく、むしろ「藝能所作」の四字で、すべての道道の技藝の意に解すべきである○大方—一般の○ふるまひ—振舞。行爲。仕業○心づかひ—心のくばり。心掛け、精神の持ちやう○おろかにしてつつしめる—天性「おろか」ではあるが、慎重に氣をつけてやる人。「おろか」は愚なことであるが、下の「たくみ」に對する語として考へる時は、特に藝能の方面に於て頭の働がにぶいと考へるがよい。不器用○得の本—「得」は「失」の反對。成功の根本○たくみ—器用○ほしきまま—ほしのまま。自分勝手にやつて、その道の傳統とか教へとかを無視すること○失の本—失敗の原因。

(第百八十九段) 今日はその事をなさんとおもへど、あらぬいそぎ先づ出で来てまぎれ暮し、待つ人はさはり有りて、たのめぬ人は來り、たのみたる方の事はたがひて、思ひよらぬ道ばかりはかなひぬ。わづらはしかりつる事はことなくて、やすかるべき事は、いと心ぐるし。日々に過ぎ行くさま、かねて思ひつるには似ず。一年の中もかくの如し。一

と見え、懐しく柔びたる形などを、靜に描き交ぜて、すくよかならぬ山の氣色、木深く世離れてたみなし、氣近き籬の内をば、その心しらひ掬ななどをなむ、上手はいと勢異に、わるものは及ばぬ所多かんめる(源氏物語、帶木)

【参考】○たのめ この言葉は「たのむ」と活用する下二段の動詞であつて、相手をして頼みに思はず。あてにさせるといふ意である。「ぬ」は打消助動詞。○あらぬ 豫期してゐることでは「あらぬ」○かく事の豫期と反する時に、人は悲觀的にもなる。

生の間も、亦しかなり。

かねてのあらまし、皆たがひゆくかとおもふに、おのづからたがはぬ事もあれば、いよいよ物は定めがたし。不定と心得ぬるのみ、誠にたがはず。

【口譯】 今日これこれの事をしようと思つてゐると、思ひもかけない急ぎの用事が、先づ生じて来て、そのために取紛れて一日を暮してしまふし、又、此方で待つてゐる人には、何か故障が出来てやつて来ず、かへつてあてにならなかつたのがやつて来るし、又、たのみにしてゐたことはあてがはづれて出来ず、思ひがけない事ばかりがうまく行く。心にかかつて氣にしてゐた事は何のむづかしいこともなく片附いて、かへつて容易だと思つてゐた事は、非常に面倒になつて来る。かういふやうに、毎日毎日に起る出来事は、前以て豫想してゐるのとは似もつかずに過ぎて行くのである。一年の間に見てもかういふ有様であり、人間の一生の間も、やはり又さうである。凡て、前以てたてた豫想は、悉く期待外れになつて行くのかと思へば、どうかすると、期待通りになつて行く事もあるのであるからして、いよいよ以て人生の萬事は前以て決めることは

この心持ちを鳴長明は其の著、方丈記に次の如く云ふ。

それ人の友たる者は、富めるを尊み、懇ろなるを先とす、必ずしも情あるとすなほなるを愛せず、ただ絲竹花月を友とせむにはしからず。人の奴たる者は、賞罰甚だしく恩顧あつきをさきとす、更にはごくみ憐ぶと、やすく静かなるとをば願はず、只我が身を奴婢とするにはしからず。いかんが我が身を奴婢とするならば、もしなすべき事あれば、則ちおのが身をつかふ、たゆからずしもあらねど、人を従へ、人を顧るよりやすし。若しありくことあれば、自ら歩む。苦しといへども、馬・鞍・牛車と心を憫ますにはしか

できないのである。つまるところは、世の中の事は何事でも、決まらな

【摘解】 ○其の事—或一つの事。これこれの事をしようと思つてゐる意○あらぬ—とんでもない。豫想もしなかつた○いそぎ—急用。急ぎの用事○先づ—その豫想してゐた事より取急がれる意○まぎれくらし—その急用に追はれて、一日を、なんとはなくそはそはと取紛れて暮してしまふ意○待つ人—此方で誰それ今日やつて来ると待つてゐる人○さはり有りて—その人に何か差支が生じて○たのめぬ人—あてにならなかつた人○たのみたる方の事—自分が頼みにしてゐる方の事○たがひて—豫期に反して○道—ここではやはり「事」の意○わづらはしかりつる事—前以て、このことは誠に、どうも面倒なことだが、うまく行つてくれればよいがなあと氣にかけてゐた事○ことなくて—案外、何の事もなく済んでしまつて○やすかるべき事—いと簡単にすむべき管の事○心ぐるし—面倒で心を痛ませる○日に過ぎ行くさま—毎日毎日に経過して行く有様。つまり、我が毎日毎日と日を送つて行く時に、その日目の経過して行く様子○かねて思ひつる—前以てかうであらうと思つてゐた意○一年の中もかくの如く—毎日毎日がさうであるからして、それを積み重ねた一年もさうであるの意○亦しかなり—それも、同じやうである。同様である○かねてのあらまし—前以ての豫想。「あらまし」は豫想○おのづから—自然と。どうかした拍子に○いよいよ—ますます以て○不定—一定不變でないこと。いつも定まつてゐないこと。

ず。今一身を分ちて二つの用をなす。手の奴、足の乗物、よく我が心にかなへり。心、身の苦しさを知れば、苦しむ時はやすめつ、まめなる時はつかふ、つかふとでも、度度過さず、ものうしとて、心を動かす事無し。如何にといはんや、常にありき常に働くは、これ養生なるべし、何ぞいたづらにやすみをらん。人を苦しめ人を憫ますは又罪なり、いかに他の力をかるべき。

○かく物事が思ひ通りにならないところから、悲觀も出れば厭世的にもなる。由つて達觀して、どんなことがあつても、取亂すやうな事があつてはいけない。

【第九十三段】くらき人の、人をはかりて、其の智をしれりと思はん、さらにあたるべからず。

つたなき人の、碁うつ事ばかりにさとくたくみなるは、かしこき人の、此の藝におろかなるを見て、己が智に及ばすと定めて、萬の道のたくみ、我が道を人のしらざるを見て、おのれすぐれたりと思はん事、大きな誤りなるべし。文字の法師、暗證の禪師、たがひにはかりて、おのれにしかずと思へる、共にあたらす。

おのれが境界にあらざる物をばあらずふべからず、是非すべからず。

【口譯】 愚昧な人が、他人の心の内を推量して、その人の智慧の程度をこの位と見當つけたと信じて、それは、絶對にあたるべきものではない。例へば、何といつて取柄もないつまらない人が、只碁を打つことだけに頭がよく働いて上手な人が（ゐたとするとして）賢明な人の碁を

打つ事だけに下手なのを見て、自分の智慧に及ばないと定めてしまつたり、又何事によらずすべての道道の専門家が、自分の専門としてゐる道を他人が知らないのを見て、自分が立優つてゐると考へたりするのは、非常に大きな間違ひであらう。又學問によつて佛敎を工夫する坊さんと坐禪によつて佛敎を工夫する坊さんが、お互ひに相手を推しはかりあつて、自分に及ばないと考へてゐることなど、兩方共に間違つてゐるのである。すべて、自分が専門としてゐることでない物事については、優劣を争つたり、批評したりしてはならない。

【摘解】 ○くらき人—暗愚な人。物の理窟が分らない人○人をはかりて—自分以外の人のことを忖度すること、おしはかること、推量すること○其の智をしれり—その人の智慧の程度を知つたこと○さらに—全然。少しも。全く○あたるべからず—その推量が當るべき筈がない○つたなき人—拙き人。何事にも足らない人。つまらない人間○さとくたくみなる—すばしくて上手である意○かしこき人—つたなき人の反對。賢人○此の藝—碁を打つ業○おろか—下手であること○己が智—自分の智慧○及ばずと定めて—及ばないと一人で決めてしまふこと。この所は、下に「又」といふ字を補つて考へるがよい。即ち「己が智に及ばずと定め、又、萬の道のたくみ云云」として讀むがよい○たくみ—工匠。技術家。繪畫でも彫刻でも、すべて技術の道にたづさはつてゐる技術家○文字の法師—佛敎を學術的に研究する

【参考】 ○文字の法師 佛敎を學問的に研究する。つまり經文だの、その他佛敎の方の書物によつて佛敎の深奥を研究する僧侶。

○暗證の禪師 右に反して禪宗では、敎文だの何かの研究はさておいて、先づ坐禪によつて佛敎の深奥を體得しようとする、その坊さん。つまり、禪僧のことになる。従つて文字の法師は禪宗以外の僧侶のことになる。

○おのれにしかずと思へる 下に「事は」とある意である。

○寛平歌會に、初雁を、友則「春霞霞みていにし雁がねの、いまぞ鳴くなる秋霧の上に」とよめる、左方にてありけるに、五文字を詠じたりける時、

右方の人人、ことごとくわらひけり。さて次の句に「霞みていにし」といひけるにこそ、音もせずなりにけり。物を聞きもはてず、ひたさわざにわらふ事、あるまじきことなり。又さやうにおもひがけぬことも、よむまじきことや。また人ありて、まことのあやまりをしたりと、我がためくるしみのなからんに、強ちに難じそしりても、何かせん（十訓抄）

○蚌（蛤）まきに出でて曝す、而して 鷓其の肉を啄む。蚌合して其の喙を拵む。鷓曰く、今日雨ふらず、明日雨ふらざれば即ち死蚌あらんと。蚌亦鷓に謂つて曰く、今日出でず、明日出でざれば、即ち死鷓あらんと。兩者

僧侶○暗證の禪師—坐禪によつて佛教の工夫をする禪宗の坊さん○たがひにはかりて—お互に相手の智を推量しての意○おのれにしかず—自分に及ばないとの意○おのれが境—界—自分の専門とするところ。ここは「境界にあらざる物」であるからして、「自分の専門としてゐるのでない、外の物事」○あらそふ—競争する。専門ちがひの人間が、それぞれの専門を自慢して見たところで、その優劣を、測定すべき尺度が共通してゐないからして、優劣を判定できないのである。であるから争つてはいけないといふのである○是非すべからず—よいとか悪いとかいつてはいけない。専門外の事は互ひに優劣を判定することはできないのであるから、これに對して、是非善惡の判定をくだすことはできないわけである。

(第百九十四段) 達人の人を見る眼は少しも誤る所あるべからず。例へば、或人の世に虚言を構へ出して人を謀る事あらんに、素直にまことと思ひて言ふままに謀らるる人あり。餘りに信を起してなほ煩はしく虚言を心得添ふる人あり。又、何としも思はで心を付けぬ人あり。又、聊か覺束なく覺えて、特むにもあらず特ますもあらで案じ居たる人あり。

相捨つるを背ぜず、漁者得て之を併せ搦にす(戰國策)
○本文の末段の「おのれが境界にあらざる物をばあらそふべからず、是非すべからず」とは金言である。人は一つだけ取り得があればそれでよい。多きは望むべきでない。

【参考】

○例へば、この「例へば」は「達人の人を見る眼は少しも誤る所がない」の「例」ではなく、一事(的)が多様に解せられる「例」としてあげたのである。斯く多様にそれぞれ受取られるが、達人はそれに迷はされない事になるの意である。

又、まことしく覺えねども、人のいふ事なればさもあらんとて止みぬる人もあり。

【口譯】 至理に到達した達人の他人の心中までも見抜く眼力は少しも誤りないものである(と断定して以下偽の様をいふ)。世間に普通に行はれる偽の一例をいへば、或人が世間に偽を作り出して人をだますことがある場合には、(一)少しも其の偽を疑ふ心はなく正直に其の事を實事と思つて、其の人の偽りいふ通りにだまされてゐる人もある(之はお人好し)(二)餘り其の偽を信じ過ぎて、其の上に自分でもまだ、一層煩雜に偽を自分の考へで付け加へて成程と思つて信用してゐる人もある(この種の人は人のいいの過ぎた馬鹿者)。(三)其の偽を何とも考へないで氣にも止めない人もある(不注意)。(四)又、少しは、變だなど不信用に思つて、其の偽をあてにもせず、又、あてにしないでもないで考へてゐる人もある(用心深い人)。(五)又、その偽を本當の事とは思はないが、人のいふ事だから、さうかも知れんと思つて、自分はそれつきりにしてゐる人もある(溫和な人)。

【摘解】 ○達人—道理に至極通じて物の末までの見込みの立つ人○眼○虚言○素直

○いつはりの諺 (一)

- うそから出た誠
- うそつきは盜賊の初まり
- うそで固めた世の中
- うそと坊主の髪はいはれぬ
- うそと牡丹餅はつく(揚ぐ、吐く)ものでない
- うそにも種がいる
- うその皮
- うそは後から剥げる
- うそは門口まで
- うそはつき次第
- うそ八百
- うそは日本の寶
- うそは誠の皮、誠はうその骨
- うそは世の寶
- うそも追従も世渡り
- うそも方便
- うそも誠も話の手管
- うそらしきうそはつくとも誠らしきうそをつく
- うそをいへば地獄へ行く

に「正直に〇言ふままに謀らるゝ偽を言ふ人の言ふ通りに、だまされてゐる〇信
〇心得添ふる」だまされてゐる人が自分の方でも自分の考へを付け加へる〇案じ居
る―考へてゐる〇人のいふ事なれば―いつてゐる人の顔を立てて。

又、様様に推し、心得たる由して賢げに打ちうなづきほほ
ゑみて居たれどつやつや知らぬ人あり。又、推し出して、
あはれさるめりと思ひながら、なほ、誤もこそ有れと怪し
む人あり。又、異なる様も無かりけりと手を拍ちて笑ふ人
あり。又、心得たれども、知れりともいはず、覺束なから
ぬは、兎角の事なく、知らぬ人と同じやうにて過ぐる人あ
り。又、此の虚言の本意を初より心得て、少しも欺かず、
構へ出したる人と同じ心になりて力を合はする人あり。

【口譯】 (六)又、色色と偽者の言を推量して、自分は其のわけがわかっ
たやうの様をして、いかにも自分はわかりのよい者だといふ風にして、
合點合點をして、にこにこ理解の様をあらはし微笑してゐるが、まるつ

うそをつかねば佛になれぬ

【参考】

〇覺束なからぬは「ぬ」と「は」との間に「人」を入れて見る。其の偽である事を、はつきり知りぬいてゐる人は「の意」。
〇兎角の事なく、偽言とも誠ともやかくやといはないで、相手にならぬ事。
〇一些事たる一寸した一つの虚言をかかすも十通りにも受取る事になる意。これに對して、達人ともいはれる人はかうも迷はされないので、ちゃんと見抜きをする。
〇いつはりの諺 (二) 商人の空誓文 市に虎あり

きりわかつてゐない人もある(早呑込みの馬鹿者)。(七)又、色色と推量して、ああ、さうでもあらうと思ひながら、それでも誤もあると怪しんでゐる人(用心深い人)もある。(八)又、其の人の説は聞いて見れば別段變つた事もない何でも無い普通平凡な説であるといつて手を打つて笑ふ人もある(薄智な人)。(九)又、それは偽だとはわかつてゐるが、偽なことを知つてゐるぞともいはないでゐるし、又何も彼もよく明かに知つて居る人は、何ともいはないで恰も其の偽である事を知らないで、だまされてゐる人と同じさまで通る人(此の人は達觀的な人で、俗人の相手にならぬよい人)もある。(十)又、この偽をなぜいふかと其の目的を初から知つてゐて、それでも少しも其の偽を惡口いはず、却てその偽を作り出した人と同じ心になり其れに加勢して偽を言ひひろめてゐる人(最も性質の悪い人)もある。

【摘解】 〇推し〇心得たる由―よくわかつたといふ様子〇さるめり―さうであるらしい尤なことだ〇手を拍つ〇心得たれど―偽だといふことは解つてゐても〇知れり―それは偽だともいひ暴露はしない〇本意〇欺かず―あざけられない。これは欺きたます意の方ではない。

愚者のなかの戯れたに、知りたる人の前にては、此の様様

【参考】

一人嘘を傳ふれば萬人實を傳ふ
一犬誤つて百犬吠ゆる
一犬影に吠ゆれば萬大聲に吠ゆ
一犬形に吠えて千犬聲に吠ゆ
一犬虚を吠ゆれば十大實を傳ふ
一杯食はず
詐る者は恐る
移木の信
うそをつけば舌を抜かる
英雄人を欺く
蛭子講の儲け話
お茶を濁す
鬼の人食はず
大嘘は吐くとも小嘘は吐く
河漢の言

の得たる所、詞にても顔にても隠れなく知られぬべし。況して明かならん人の、惑へる我等を見んこと、掌の上のものを見んが如し。但し、かやうの推し測りにて、佛法までをなづらへ言ふべきにあらず。

【口譯】 愚者同志の、今一例をあげた虚言をいふといふ如き戯れでも、其の真相を知つてゐる人としては、かくも十通りといふ様な虚言に對する受け入れ方が、其の各人の詞にも、其の顔附きにでも隠れなく、たしかにあらはれることであらう。ましてや「知りたる人」よりまして「達人」といふ事理に明かならん人が、我等の如き事理に惑つてゐる愚物を見た時には、掌の上のものを見る如く明瞭に見抜くことであらう。(重ねていふが達人の人を見る眼は少しも誤る所はないものである)。しかし、以上の如き推測の態度を以て佛法上の方便をもそれにあてはめて、言つてはならぬ、佛法の方便は別段のものである。

【摘解】 ○愚者のなかの戯れ—始の「世に虚言を構へ出して人を謀る」ことをいふ。○知りたる人の前—此の虚言の事を、よく知つてゐる人としては○此の様子の得たるところ—十通りの人人の各受取り得た種類の様〇況して—此の場合の「知りたる

○隠れなく知られぬべし
「知りたる人」に「知られぬべし」である。「ぬ」は「たしかに」の意。
○いつはりの諺(三)
話半分
看板に偽なし
空鐵砲
鏡花水月
口二つで物言ふ
食はぬ腹肥やす
君子二言なし
假病脈作らず
講釋師見て来たやうなうそをつき
三人市虎を成す
姑の十七見た者が無い
清藏が兎
千三つ
宗祇の蚊屋
曾參人を殺す
出放題
話半分繪そらごと
女のはがると猫の寒がるはうそ

人」よりも増して一般的に事理に明かなる達人のこと。

(第二百九段) 人の田を論ずるもの、うたへにまけて、ねたさに、「其の田をかりてとれ」とて、人をつかはしけるに、先づ道すがらの田をさへかりもてゆくを、「是は論じ給ふ所にあらず。いかにかくは」といひければ、かるものども、「其の所ともかるべきことわりなければ、僻事せんとてまかる者なれば、いづくをかからざらん」とぞいひける。理り、いとをかしかりけり。

【口譯】 他人の田地の所有を争つた人間があつて、訴訟に敗れたので、癪にさはつた揚句、「其の田の稻を刈つて取つてしまへ」といつて、人をやつたところが、その男達、先づ以て、行く道すがらの田圃をさへ刈り取つては行くので、「この田圃は訴訟の問題になさつた所ではない。それだのに、何故、そんなことを……」と、(傍の人が) いったところ、刈る男達は「其の問題になつた田圃だとても、刈り取るべき理由はないのだ

【参考】
○いかにかくは 下に「刈り給ふぞ」と入れて見よ。
○いづくをかからざらん 元元、命ぜられて刈りに行く田圃それ自身だつて刈取つてよい譯のもではない。それを押切つて刈りに行くのである。どうせ横車を押して行くのである。刈つていい田も、刈つて悪い田もあるものかといふやうな筋合である。
○此の段にあてはまる諺
自暴自棄
棄鉢
毒食はば血をねぶれ
毒を食はば血まで
ままの皮
やけの勘八
やぶれかぶれ

けれども、元元、曲つた事をしようとして出掛ける我我なのですから、何處だつて刈らない場所がありませんか。手當り次第に刈りますよ」と答へた。この妙な理窟は、全く降参した。

【摘解】 ○人の田を論ずるもの「人の、田を論ずるもの」とも解釋できるが、素直に「他人の田圃を自分のだと主張して、その所有権の問題を争つた人」の意に解する方がよい。○うたへー訴訟。うつたへー○まけてー敗れて○ねたさにーくやしみのあまり。ねたましさに○其の田ー問題の田○人をつかはしー自分の使用人か何かを數人差しつかはしたのである○先づーそれに先立つて。問題の田を刈るに先だつて○道すがらの田ー行く途中の田○さへもー強辭○かりもてゆくーだんだんと刈りつつて行く○論じ給ふ所にあらざー訴訟の問題になつた田圃ではない○いかにかくはーそれだのどうしてかういふやうなことをするのかの意○其の所ともかるべきことわりなければどもー刈つて来いといはれた田圃でさへも、もともと此方が悪いのであるからして、訴訟に敗れたからといって、刈り取つてしまふべき理由はないのであるがの意○僞事ー道に外れた悪事○まかる者ー行く者○いづくをかからざらんー何處を刈らないでおかうか、どこだつて刈つてしまふのだ○理りー理窟○をかしかりけりーその男のいふ、いかにも妙な理窟にまけてしまつて、何だか面白かつたといふのである。感心していつてゐるのでなく、笑談半分についてゐる言葉。

（第二百十一段） 萬の事はたのむべからず、おろかなる人は、

ふかく物を頼むゆゑに、うらみいかる事あり。

いきほひありとてたのむべからず。こはきもの先づほろぶ。財おほしとて頼むべからず。時のまに失ひやすし。才ありとて頼むべからず。孔子も時にあはず。徳ありとて頼むべからず。顔回も不幸なりき。君の寵をも頼むべからず。誅をうくる事速なり。奴したがへりとして頼むべからず。そむきはしる事あり。人の志をもたのむべからず。必ず變ず。約をも頼むべからず。信ある事すくなし。身をも人をもたのまざれば、是なる時はよろこび、非なるときはうらみす。

【口譯】 いかなる事でもそれを頼りにしてはならない。愚かな人は、深く物事を頼りにするからして、それが思ふ通りに行かない時には恨んだり怒つたりする事があるのである。（例へば）權勢があるからといってそれを頼りにしてはいけない。何故かといふに、強い者は先づ亡びるのである。財寶が多いからといって、それを頼りにしてはいけない。そんな

大の養で敵打つ
江戸の敵を長崎で打つ

言語道斷

沙汰の限

テニハが合はぬ

平仄があはぬ

無理が通らば道理が引込

藪に馬鐵

横紙やぶり

理不盡

盜賊にも三分の理あり

盜人にも三つの道理あり

屁理窟

理窟と膏藥は何處へでも

つく

【参考】

○顔回 論語の雍也篇に、「哀公問ふ。弟子孰れか學を好むとなす。孔子對へて曰く、顔回といふものあり。學を好み、怒を遷さず、過を二たびせず。不幸にして短命にして死す。今や則ち亡し。未だ學を好む者を聞かざるなり」とある。この「不幸」の語をとつたのである。
○人生世相の變轉を説く。思はず高山樗牛の文の一節を誦す。
世に哀れは平氏とぞ云ふめる。まことにこの一門の盛衰を考ふれば、心も言葉もなかなか及ばざりけり。案ずれば、一旦の榮華に耽りて、百年の謀を思はず、秋や嵐の吹きすさばんずあした、なほ春の夜の夢まぼろしにして、醒めての後は、行手

かものは、すぐになくしてしまひやすいものであるからである。才能があるからといって、それを頼りにしてはいけない。孔子のやうな聖人も時代に入れられずして不遇に世を終へた。徳があつたからといって、それを頼りにしてはいけない。顔回のやうな賢人でも不幸であつた。君公の恩寵を被つてゐるからといって、それを頼りにしてはいけない。忽ちにして誅罰を受ける事がある。奴僕が服従してゐるからといって、それを頼りにしてはいけない。彼等はややもすると背いて退き去ることがある。他人の好意をも頼りにしてはいけない。必ず變つてしまふ。他人との約束をも頼りにしてはいけない。約束通りに行くことは少いのである。自分をも他人をも、頼りにしなければ、よい時には喜び、都合の悪い時も誰も怨まないですむのである。

【摘解】 ○たのむ—信頼する。たのみにする○おろかな人—下愚の人。愚直な人馬鹿者といふほど強い意ではない○いきほひ—勢。勢力。権力○こはきもの—強者。即ち権力ある者をいふ○財—財寶○時—時の間—忽ちの内に○失ひやすし—なくなしがつちである。火災とか水害とか突發事で、失ひ易いことをいふ○才—學藝。學問藝事○孔子—大聖孔子はあれほどの聖人でありながら、時代に容れられず、殆ど一生を諸國流浪して終つたことをいふ○時—時代には容れられぬ○顔—同—孔子の弟子。「賢なる哉回や」と師孔子をして讚歎せしめた顔回も年若くして陋巷に逝いた○寵—恩寵。君公に氣に入られること○誅—罪ありとして殺すこと○速—速なり—君

をば流石に浮世と観じても、先世後代、既に核を代へたるを如何にすべき。今を昔にかへさむ術も、片絲のよりくづれたる世こそ、かへすがへすも是非なけれ。(中略)翠華搖搖として西に向へば、秋風到るところ野に充てり。ああ昨日は東關のふもとに響を並べて十萬騎。今日は西海の波に響を解きて七千餘人。行く手の空はわかねども、身にむし秋は欺かれず、渚によする波の音、袂にやどる月の影いづれか心を傷ましめざるべき。月の出るさの山の端を、あなたの空とや思ほしけむ、日暮杖に笛ふく人あり、響は遠く煙波をかすめて、三軍ひとしく耳をそばだつ。嗚呼、この時此の人想ひ

公の氣が急に變つて手打ちにされたりする例など多いそれをいふ○奴—しもべ。下僕○そむきはしる—主人に背いて逃げ去ることをいふ○人の志—他人の厚意○約—約束事○信—まこと○是—よい場合。うまく物事がはこんだ場合○非—是の反對。うまく物事がはこばない時。

左右ひろければさはらず、前後遠ければ塞がらず。せばき時はひしげくたく。心を用ふる事少しきにしてきびしき時は、物にさかひ、あらそひてやぶる。ゆるくしてやはらかなる時は、一毛も損せず。人は天地の靈なり。天地はかざる所なし。人の性なんぞことならん。寛大にしてきはまらざる時は、喜怒是にさはらずして、物のためにわづらはず。

【口譯】 左右が廣ければ、物に邪魔されないし、前後が遠く離れてゐれば、行きづまることがない。之に對し、自分のまはりが狭ければ、(周圍に壓迫されて)つぶれて碎けてしまふ。又心を細事に用ひてこせこせとし、ゆるりとしたところが無い時は、物事と衝突し、他人と争ひをして身を破るに至る。之に反して、ゆつたりとして、そしておだやかである

果して如何(中略)かくて平家は亡びぬ、亡ぶる迄も成敗の爲に其の名節を拄ぐる事をなさざりき。

【参考】

○靈—靈妙不可思議の意である。書經の泰誓に「惟だ人は萬物の靈なり」とあるのを引用した句である。

○左右ひろければ云云—夏目漱石の二百十日を思ひ出す、左に。

智に働けば角が立つ。情に轉させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住み苦いと悟つた時、詩が生れて、畫が出来る。人の

ならば、毛筋一本を書ふこともない。一體、人間といふものは、天地の間に在つて、一番靈妙なものである。天地は宏大にして、何等局限するところはない。人間の平性もどうして、これと異ならうや。だからして、ゆるくのびやかに大きく、そして窮屈な行きづまつた事さへないならば、喜びや怒の感情が、心のさはりとなることもなく、外物のために煩はされることはないのである。

【摘解】 ○左右—右と左。次の前後に對す○前後—左右と一緒になつて、自分の前後左右の意。自分の周囲が廣ければの意である○さはらず—妨げとなるものがないこと○塞がらず—行詰ることのない意○せばき時—周囲のせばきこと○ひしげく—ひしやけて碎けてしまふ意。ひしげはつぶれること○少しきにしてきびしき時—心を用ふるのに狭い範圍内だけで、こせこせとしてをり、嚴重でゆつたりしたところがないこと○物にさかひ—外物に衝突すること○あらそひやぶる—他人と争論して、我が身をやぶるに至る意○一毛—一本の毛。少しのこと○人は天地の靈—人間は萬物の靈長であるの意○かざる所なし—天地は局限し、境界だてする所なく、どこまでもひろびろとしてゐる○人の性—人間の本來の性質○喜怒哀樂にさはらず—喜怒哀樂の感情が生じて、ひろびろとしてゆつたりした心であるならば、その感情のために、心が痛められたりしない意○物のためにわづらはず—外物のために煩はされることがないの意。

世を作つたものは神でも無ければ鬼でもない。矢張り向う三軒兩隣にちらちらする唯の人である。唯の人が作つた人の世が住みにくいからとて、越す國はあるまい。あれば人でなしの國へ行く計りだ。人でなしの國は人の世より猶住みにくからう。越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか、寛容けて、東の間の命を、東の間でも住みよくせねばならぬ。ここに詩人といふ天職が出来て、ここに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は人の世を長閑にし、人の心を豊かにするが故に尊い。

【第二百十五段】 平の宣時朝臣、老の後、昔語に、最明寺入道、或宵の間に呼ばるる事ありしに、「やがて」と申しながら、直垂無くて兎角せし程に、又使來りて、「直垂などの候はぬにや。夜なれば異様なりとも疾く」とありしかば、萎えたる直垂、うちうちのままたて罷りたりしに、銚子に土器取り添へてもて出でて、

【口譯】 平の宣時朝臣が、老後に、昔若い時の話として「主人最明寺入道時頼さまが、或夕方間に私を呼び寄せられた事がありました時、私は「すぐ参ります」と申しながら、私は晴の直垂が無いので、あれこれとまごついて居たりちに、又、時頼さまからの使者が来て、「あなたは晴の直垂がお持ちが御座いませぬのですか。何、夜の事であるから誰も見てゐる人は有りません、風がはりであつても早く御出でなさい」との事でありましたから、私も遠慮なく、着古したぐにやぐになつた直垂を着て、家に居る不斷着のままに訪問しました所、銚子に土器杯を取り揃へて持つて出られて、

【参考】

○直垂の無くて 餘所行き
の晴の直垂が無かつたの
である。

○罷りたり 「参り」といふ
べき所だけれども、當時
は「参る」ことも「まか
る」といひなれた。

○時頼の川柳

味噌をなめなめ時頼も数
猷なり

愚者の知る風味にあらず

味噌の酒

執權のうまみは味噌で飲

んだ所

焼飯(北條氏の紋の見立)

の世は生味噌で酒を飲み

人知らぬ酒盛り味噌で名

が残り

生味噌はけちと田樂にて

をどり

味噌で治まり田樂(高時)

にて亂れ

北條の時分天下は坊主も

【摘解】 ○平の宣時朝臣—大佛、宣時の事。北條氏で、時政の曾孫。朝臣は四位の人につけた敬語。様といふも同じ。○老の後—老後に至つて。○昔、語—若い時のことをいふ話。○最明寺入道—北條時頼のこと。入道してから自分の建てた最明寺に住んだのでかういつた。○宵の間—昔は庶民の常服であつたが、北條氏頃は禮服となつてゐた。○異様—變の様子。風がはり。○候はぬにや—下に「あらん」などを略す。○疾く—下に「來給へ」など略す。○萎え—○罷り。○銚子—酒を入れる金屬で造られた道具で、長い柄がついてゐる。今の徳利の用をなしたものの。○土器—素焼のさかづき。○もて出でて—持つて其の客間に出て。

「此の酒を一人たうべんが、さうさうしければ、申しつるなり。着こそ無けれ。人は静まりぬらん。さりぬべき物やあると、何處までも求め給へ」とありしかば、紙燭さして、限限を求めし程に、臺所の棚に、小土器に味噌の少し附きたるを見出でて、「これぞ求め得て候」と申ししかば、「事足りなん」とて、快く數獻に及びて、興に入られ侍りき。其の世には、斯くこそ侍りしか」と申されき。

ち
○時頼の母松下禪尼
つれづれの骨は禪尼の障子なり
切張の跡で意見の刷毛ついで
和漢のいけん切張と機をきり

【参考】

○静まりぬらん たしかに静まつて居よう。
○紙燭 シシヨク・シソクと讀む。字も脂燭ともかく。二あつて、一は紙擦に脂をつけてともすあかり。二は松の樹を細く徑三分程に削つて、長さ一尺五寸程に作り、先を燻ふらせて焦し、其の上に油を引き、手で持つ

【口譯】 「此の酒を私一人で飲むことが、寂しいから、いらつしやいと申したので。酒の肴は無いが、下部たちはもう各の部屋にさがつて静かに休んでゐようそれを使ふのはかはいさうだ。何か肴になりさうな物があるかと、あなたは何處の隅隅までも捜して下さい」との事であつたから、あかりをつけてすみずみまで見附けあるいたら、お勝手の棚に小さいかはらけ(小皿)に味噌が少しおつけにしてあつたのを見出して、「このものを見附けて持つて参りました」と云ひましたところが「それで十分であらう」と時頼様が云はれて、心持ちよく數杯飲まれて、愉快になられました。其の時代には、まあざつとこんな儉約振りでした」といはれました。

【摘解】 ○一人—たうべんが—「たべんが」の意味。酒を飲むことを、酒をたべるといふ。その「たべ」の間に「う」を入れて「たうべ」といふ。○さうさうし—寂し。寂しいの音便。○肴—酒の肴は無いが—の意。○人—お勝手向きの使用人。○何處—紙燭—手あかり。○さし—ともし。○限限—すみずみ。○臺所—小土器。○附き—お菜を附ける。などの「附け」で、其の者の分として供すること。附着の意味ではない。○數獻—酒數杯。獻酬(ヤリトリ)したこと。○斯くこそ侍りしか—誠に斯うで御座いました。

所を紙で巻いたものである。一寸としたあかりに使用する。
○事足りなん 「な」は完了助動詞「たしかに」の意。たしかに其の事は足りようの意。
○時頼の臣佐野源左衛門常世の川柳
のうのうと呼ぶ宿引の品のよき
響と呼んだは常世ひきかくし
佐野の宿その日雨だと居所なし
源左衛門さぼてんなどはとうに賣り
やれ根太はよしやれよしやれと最明寺
あの馬は乗れますまいと最明寺
源左衛門鎧を着ると大が吠え

〔第二百三十一段〕 その別當入道は、さうなき庖丁者なり。ある人のもとにて、いみじき鯉をいだしたりければ、皆人、別當入道の庖丁を見ればやと思へども、たやすくうちいでんもいかがとためらひけるを、別當入道さる人にて、「此の程百日の鯉をきり侍るを、今日かき侍るべきにあらず。まげて申し請けん」とてきられける、いみじく、つきづきしく、興ありて人ども思へりけると、ある人、北山太政入道殿にかたり申されたりければ、「かやうの事、おのれはよにうるさく覺ゆるなり。『きりぬべき人なくば、たべ、きらん』といひたらんは、なほよかりなん。何でふ、百日の鯉をきらんぞ」とのたまひたりし、をかしく覺えしと、人のかたり給ひける、いとをかし。

【口譯】 園の別當入道といふ人は、雙ぶ者もないほど料理の名人である。

【参考】

○その別當入道 藤原基氏。權中納言基家の三男で、貞永元年に檢非違使の別當になり、文暦元年致仕して出家し、弘安五年に歿した。年七十二。關氏はこの基氏を祖とする。別當入道は、彼が檢非違使を勤め、後に出家したからいふ。

○北山太政入道 西園寺公經入道して覺勝といふ。

○きられける、いみじくつきづきしく「きられケル」の下に「事は」と有るのを略したのである。若し其の「事は」を略したのではないとせば「きられケリ」としなれば誤格である。

○のたまひたりし、をかしく覺えしと之も「のたまひたりシ」の下に「事は」と有るを

或人の所で、いとも立派な鯉を出したので、誰も彼も、別當入道の料理ぶりを見たいものだと思つたが、無暗にいひ出すのもどうかと遠慮してゐたところ、別當入道も隅に置けない如才ない人で、「この頃、百日間鯉料理をすることを念掛けてゐますが、今日だけ中絶するわけにも参りません。御無理でも、私が頂戴致しませう」といつて、料理して見せてくれた。いかにも、その場合に似合はしく氣が利いた挨拶なので面白く人は感じたのであつたと、かういふ話を、或人が北山の太政入道殿に語りかされたところが、入道のいふには、「さやうなことは、自分は、いかにも厭はしく感ずるので、料理する人無ければ、下さい。私が料理致しませう」といつたならば、一層奥床しいだらう。なんで、百日間鯉の料理するなどの願をかけるものか」とおつしやつたが、實に興味ある言葉と感じたと、ある人が自分に話してくれた。全く、面白い話である。

【摘解】 ○その別當入道 藤原基氏のこと ○さうなき 雙無き。双ぶものない ○庖丁者 庖丁に巧みな人。料理の名人 ○いみじき鯉 立派な鯉 ○庖丁料理のしぶり ○見ばや 見たいものだ ○たやすく 容易。ここでは、ぶしつけに。無遠慮に ○うちいでんも 口に出して、その料理の仕振りを見たいものだ と乞ふこと ○いか が どのものだらうと遠慮すること ○ためらひ 躊躇すること。遠慮すること ○さる人 今いふ「さる者」と同じ。ぬからぬ人間 ○百日の鯉をきり侍るを 百日

略したのである。若しその「事は」を略したのでないとせば「と、のたまひたりキ」としなれば誤格である。

○人のかたり給ひける、いとをかし

之も「人のかたり給ひケル」の下に「事は」と有るを略したのである。若しその「事は」を略したのでないとせば「人のかたり給ひケリ」としなれば誤格である。

○いかがとためらひけるを此の「ア」は活用語の連體形（ここでは「ケル」の下に接して、「ノニ」の意となる。

○百日の鯉をきり侍るを此の「ヲ」も同様、活用語の連體形（ここでは「侍ル」の下に接して、「ノニ」の意となる。

間鯉の料理をしようと念願を立ててゐるので○今日かき侍る—今日だけそれをやめることもできないの意。「かき」は缺くこと。中絶すること○まげて申し請けん—無理ではあらうが是非に頂いて、それを料理しようと思ふの意○きられる—料理なされた○いみじく—まことに立派であること○つきづきしく—その場合に似合はしく、うつてつけの振舞であるの意○興ありて人ども思へりける—興味満點に人人は考へたの意○北山太政入道—西園寺公經の事をいふ○かやうの事—百日の鯉をきる願を立てたなどと仰仰しいひ草をする事○おのれ—自分○よに—全く、まことに○うるさく—今いふ、うるさいと同じ意。苦苦しくの意○たべ—賜はれ(命令形)○何でふ—何とて○きらんぞ—馬鹿馬鹿しいにも程がある。百日間、毎日鯉の料理をするなど願を立てる人があるものかといふほどの強い意○のたまひたりし—仰せられた○をかしく—ここでは如何にも興あることの意。

大方、ふるまひて興あるよりも、興なくてやすらかなるが、まさりたる事なり。まれ人の饗應などもついでをかききやうにとりなしたるも、誠によけれども、ただ其のこととなくてとり出でたる、いとよし。人に物をとらせたるも、ついでなくて、是を奉らんと云ひたる、まことの志なり。惜

しむよししてこはれんと思ひ、勝負の負けにことづけなどしたる、むづかし。

【口譯】 凡て、趣向をこらして面白くしようとするよりも、面白みはなくとも、すらりとさつぱりしてゐる方が、すぐれてゐる事なのである。客人の接待などにしても、うまい工合によい機會があつた如く取りつくりつたのも、それは又それでよいけれども、ただ何となく御馳走を出したのが、ほんとによいのだ。人に何か物を興へるにも、別に何のきつかけもなく、これを上げませうといふのが、ほんたうの厚志といふものである。惜しさうなそぶりを見せて、先方から頂きたいといひ出させようと思つたり、又は勝負事にわざわざ負けて見せて、その賭物にかこつけたりするのは、いかにも小うるさくて厭味なものである。

【摘解】 ○ふるまひて—いろいろの趣向をこらして大向うの喝采を博さうとすること○興ある—人に喝采され面白く思はせること○興なくて—そんなことごとしいことしらへごとの面白さはなくとも○やすらか—安易。さつぱりとして厭味のないこと○まれ人—客人○饗—御馳走。接待○ついでをかききやうに—機會がうまくいつたやうに取りつくるふこと。例へば、別に歓迎したいほどでもない客が来たやうな場合に、「ああいい所へお出でなすつた」などと心にもない世辭を並べたてるやう

○興ありて人ども思へりける

此の「ける」は「ケリ」

とすべき所。

○をかしく見えしと、ひと

の語り

此の「見えし」は「見え

キ」とすべき所

○この文のこの節は再三讀

むと文脈がわかる。

徒然草の文は色色大切な

語法があるから、熱心に

研究すべきである。

【参考】

○負けにことづけ 例へば、この品を相手の人にやらうと思ふ場合、只それを興へるのは、あまり趣向がなきすぎるからと考へすぎて、何か勝負事を二人してやつて見て、自分は、わざわざその勝

負事に負けて見せ、「や

あ、これは負けましたな

あ」などと頭を掻いて見

せて、では、これを差上

げませう。などといふや

うに、持つて廻つたやり

方をする事。

○炭俵の端午の連句に嵐雪

の、

文も無く口上も無し(チ

五把

といふのがある。

本段の主趣にかなつてゐ

るものである。

○岩淵夜話別集に、

惣じて此の作左衛門(本

多重次)は、物のくどきを

を嫌ひ、手短く埒明く事

を好む生れつきなり、或

時、旅宿より、女房の方

へ文を差越すとて

一筆申す、火の用心。

おせん瘠さすな。馬肥

やせ。かしく。

なこと○とりなしたる—とりつくろふ。こしらへる○ただ其のこととなくて—ただ何といふことなしに○とらせたる—物を興へたにしても○ついでなくて—別にむづかしい理窟や口^{コウジヤク}上なしに、何とはなしにの意○まことの志なり—ほんたうにその人にその品物をやらうといふ厚意である。何何だから之をあげようとかいつて、何事かにかこつけたりなどするのは不純な志であるといふのである○こはれん—乞はれて。欲しがられようと思ひ○負^{オウ}わざ—勝負事に負けること。

と書きたるとなり。
○おせんは重次の男仙千代(成重)
○時雨れけり。走り入りけり。露れにけり(惟然坊)
○來たり。見たり。勝てり(シーザー)

【第二百三十三段】

萬のところがあらじと思はば、何事にもまことありて、人をわかすうやうやしく、言葉すくなからんにはしかじ。男女、老少、みなさる人こそよけれども、ことにわかかたちよき人の、ことうるはしきは、忘れがたく、思ひつかるるものなり。
萬のところがは、なれたるさまに上手めき、所えたるけしきして、人をないがしろにするにあり。

【口譯】 萬事あやまちを仕出かすまいと思つたならば、何事にまれ誠心

【参考】
○には若かじ「の方がよい」の意。
○かたち 中古風の文の「カタチ」は容貌のこと。
服装等の形ではない。
○或人曰く、人は慮なく、いふまじき事を口とくいひだし、人の短きをそしり、したることを難じ、かくすことを顯はし、恥かましきことをただす。これらはすべてあるまじきわざなり。我は何となくいひ散らして、思ひも

をこめて、いかなる人に對しても、同じやうに恭しく、言葉少なにするに及ぶことはない。男でも女でも、又老人でも若者でも、みな、さういふやうな人こそよのだが、殊更に、年若な容貌も秀麗な人の、言葉が立派なのは、仲仲忘れられないほど心に思ひ留められるものである。萬事のあやまちは、慣れきつた様子に上手ぶり、いかにも得意げな振りをして、人を人とも思はない所に生ずるのである。

【摘解】 ○萬のところが—萬事に過ちあること。とがは咎であつて、過失の意○まことあり—誠心誠意をつくしてその事をする事○人をわかす—身分のよい人だから丁重にする、身分の賤しい人だからぞんざいにするといふやうに、人によつてその態度を改めること○しかじ—及ぶまい。それが一番であらう○わか—年配が丁度年頃なのをいふ○かたちよき—容貌がすぐれて美しいこと○こと—言葉○うるはしき—立派であること○思ひつかるる—心に留められる。なつかしく慕はしく感ぜられる意○なれたるさま—慣れ切つた様子で○上手めき—上手ぶり○所えたるけしきして—その事に得意然たる様子をして○ないがしろにする—輕蔑すること。人を人とも思はぬこと。

【第二百三十四段】

人の物を問ひたるに、知らずしもあらじ、

入れぬ程にいはるる人は、思ひつめて、憤深くなりぬれば、はからざるに恥をも興へられ、身の果つる程の大事に及ぶなり。笑みの中の劍は、さらでだに恐るべき物ぞかし。又よくも心得ぬ事を、悪しざまに難じつれば、却りて身の不覺あらはるるものなり。大方口かるきものになりぬれば「某」に其の事な聞かせそ。彼の者にな見せそ—などいひて、人に心おかれ隔てらるる、口惜しがるべし。又人の包む事の自ら漏れ聞えたるにつけても、彼はなされしなど疑はれんは面目なかるべし(十訓抄)

【参考】

ありのままにいはんはをこがましとにや、心まどはすやうにかへりごとしたる、よからぬ事なり。しりたる事も、なほさだかにと思ひてやとふらん。又、まことにしらぬ人もなどかなからん。うららかにいひきかせたらんは、おとなしくきこえなまし。

【口譯】 人が物を尋ね問うた時に、彼は知らないのでもあるまい、(知つてゐるくせに、わざと聞いて私をためすのだらうからと考へ) 事實の通りに答へてやるのも馬鹿馬鹿しいといふのであらうか、聞いた人の心が迷ふやうに返事をするといふことは、よくないことだ。相手の人は、よしんば、知つてゐる事でも、なほ、明瞭にしようと思つて問うてゐるかも知れない。又、ほんたうにその事を知らない人だつてなくもないだらう。であるからして、よくはつきりと説明してやつたならば、穩やかに響くことであらう。

【摘解】 ○人の物を問ひたるに—他人が、何か物事を訊ね聞いた場合に○しらずしもある—知らないわけでもあるまい。此方が問うてゐる人の意中を推察して、彼

○をこがまし「をこ」といふ語は、あはうらしいこと。こがまし「も同じであつて、馬鹿らしいこと。こしやくなことの意。この「をこ」といふ言葉に「尾籠」と漢字をあて、それを「尾籠」と音讀して、失禮な、無禮な意に、後世用ひられるやうになつた。

○此の段とは直接の關係は無いが「摸稜」の意をいへば左の如くである。

唐書、蘇味道傳に、蘇味道、相と爲る、常に人に謂ひて曰く、事を決するに、明白を欲せず、誤れば則ち悔あり、摸稜して兩端を持して可なりと、故に世に摸稜手と號す」とある。即ち人に物事を問はれる時は、可否

することをせず、手を以て坐するところの林稜を摸でてどちらともつかず依違してゐるのみであつたといふことである。

【參考】

○聞きもらすあたり 本によつては、このところが「聞きもらすかたもあれば」とか、又は「聞きもらすこともあれば」などとなつてゐるが「あたり」が一番よい。

○きこえなまし「なまし」の「な」は完了助動詞「ぬ」の未然形。これは此の場合は無視して無いものとするがよい。「まし」は「ん」と見て「きこえなまし」は「きこえん」と見てよし。

は、こんなことを知らないわけはないと思ふこと○をこがまし—馬鹿馬鹿しい○とにや—といふのであらうか○心まどはすやうに—問ふ人が、その答を聞いて、どつちに決めていいか分らないやうな、あいまいな返事をする事○かへりごと—返事○なほさだかに—なほいつさう確かに○などかなからん—多い人の中には、一人や二人は、ほんたうに知らない人もあるにちがひないの意○うららかに—麗かに。はつきりと明瞭に○おとなしく—穩當に。

人はいまだ聞き及ばぬ事を、我がしりたるままに、「さても其の人の事のあさましさ」などばかりいひやりたれば、「如何なることのあるにか」と、お返しとひにやるこそ、心づきなけれ。世にふりぬる事をも、おのづから聞きもらすあたりもあれば、覺束なからぬやうに告げやりたらん、あしかるべきことかは。

【口譯】 それから又、他人がまだ聞き知つてもゐない事を、自分が知つてゐるからといつて、「さてもまあ、だれそのあきればたことを…」

などただけ（手紙に書いて）いつてやつたりすると（先方では何のことか見當もつかないので）「一體どんなことがあるのですか」と、折り返して聞きにやるなどといふことは、どうも面白くないものである。世間に知れ渡つて舊聞に屬する事をも、どうかした拍子に、聞きそこなふやうな人もあるのであるからして（何事にまれ）いい加減でなくはつきりといつてやるといふことは、悪いことであらうか。決して悪いことではないのである。こんなことは、世間慣れない人によくある事である。

【摘解】 ○人—この人は他人の意〇ままに—知つてゐるからといつて〇さても—發語。さてさて〇其の人—「我が」と最初の「人」との相方でもない別な人。だれそれと他人の噂をする場合〇あさましき—あきれて物がいへないといふほどの意〇などばかり—詳しいことは何も書かず、單に「誰それはあきれた人です」とだけ書いてやること〇心づきなけれ—氣にくはないことであるの意〇ふりぬる事—世間で古い誰も知つてしまつたこと。舊聞となつてしまつたこと〇おのづから—自然と。どうかした拍子に〇あたり—邊。人達〇覺束なからぬやう—ぼんやりしてゐないやうに。はつきりと〇あしかるべきことか—悪いことであらうか、否さうではない。よいことである。反語〇ものなれぬ人—物事に慣れぬ世間に慣れない人。

（第二百二十五段）ぬし有る家には、すすろなる人、心のま

まに入りくる事なし。あるじなき所には、道行き人みだりに立ち入り、狐・ふくろうやうの物も、人げにせかれねば、所得がほにいりすみ、こだまなど云ふ、けしからぬかたちもあらはるるものなり。又、鏡には色かたちなき故に、萬のかげ來りてうつる。鏡に色・かたちあらましかば、うつらざらまし。

【口譯】 主人ある家には、何の關係もない怪しげな人が、勝手氣儘にはひつて來る事がない。主人のゐない所には、道行く人も、むやみと立ち入り、狐だの梟だのといふやうな物も、人の氣配に邪魔されないからして、我が物顔してはひり込み、樹木の精などといふ、とんでもない妖怪の類もあらはれるのである。又、鏡には色も形もないからして、あらゆる形象がそれに映るのである。鏡に色や形があつたとしたらば、物の形象は映らないであらう。

【摘解】 ○ぬし—主人。家の持主といふ意であるが、この場合は、それほど嚴密の意味ではなく、その家に住んでゐる人人をいふのである〇すすろなる人—何の關係

○本節とは直接關係は無いが便宜上難訓をいふ。

- 一口 いもあらひ
- 七夕 たなばた
- 七五三 しめ
- 九折 つづらをり
- 九十九 つくも
- 十寸鏡 ます鏡
- 三枝 さいくさ
- 木乃伊 みいら
- 王仁 わに
- 日下部 くさかべ
- 勿來 なこそ
- 主税 ちから
- 四阿 あづまや
- 百足 むかで
- 東海林 せうじ
- 春日 かつが
- 飛鳥 あすか
- 春宮 とうぐう
- 勅使河原 てしがはら

【參考】

○こだま 漢字は木精とか木魅とか、又は木魂とかいふ字をあてる。樹木の精靈である。劫を経て老木には精靈があつて、種種の怪しいことを起すといはれてゐる。反響の意の「こだま」とはちがふ。

○鏡 鏡は一物をたくはへず、私の心なくして、萬象を照らすに是非善惡の姿あらはれずといふことなし。その姿に従ひて感應するを徳とす。これ正直の本源なり（神皇正統記）

○左文を品詞に別つ
ぬし……………名詞
有る……………ラ變、連體
家……………名詞
に……………助詞
は……………助詞
すすろなる…形容動詞
人……………名詞

もない怪しげな人○心のままに―勝手氣儘に○入りくる―はひつて来る○あるじ―前の「ぬし」と同じ。主人○道行き人―通行人○みだりに―狼りに。勝手氣儘に。むやみと○狐ふくろう―狐や鼻などの怪獸化鳥をひつくるめていつたのである○人げ―人氣の意で、人の住んでゐる氣配○せかれねば―おしとどめられぬいからして○所得がほに―我が物類をして○いりすみ―はひり込んで住みつき○こだま―樹木の精靈○けしからぬかたち―とんでもない妖怪の類「かたち」は形であるが、ここでは妖怪のたぐひの意と解するがよい○萬のかけ―いるいるの「かけ」。「かけ」は陰翳。光線。形象など多くの意味があるが、ここでは形象○あらましかば―若しあつたとしたならばの意。假定の意である。事實はないのであるけれども、もしあつたとしたならばといふほどの意である。

虚空よく物をいる。我等が心に念念のほしきままに來りうかぶも、心といふもののなきにやあらん。心にぬしあらましかば、胸のうちに若干のことは入りきたらざらまし。

【口譯】 全然何物もない空虚なところは、あらゆる物を何でも抱擁してられる。我々の心に種種難多な考へが勝手氣儘に浮かび生ずるのも、心といふものそれ自身に主人がないからであらう。心に主人があつたならば、胸中に、かかる色色の事は入つて來はしまし。

【摘解】 ○虚空―全く何もないこと。今日いふ空中の意の虚空ではない○我等が心―我々の心中○念念―念とは念慮。考へ。多くの考へである○ほしきままに―自由自在に○心といふもの―我々の「心」といふもの○なきにやあらん―心そのものが無いといふのではなくして、心の中が空虚であるといふ意に解すべきである○ぬし―主人。心の中にあるものが入込んでゐたらばの意○胸の中―心の中といふものと同じ○若干―今いふ若干の意でなく、多くの事柄の意。

ば、胸中に、かかる色色の事は入つて來はしまし。

(第二百三十六段) 丹波に出雲といふ所あり。大社をうつして、めでたくつくれり。しだのなにがしとかやする所なれば、秋の比、聖海上人、其の外も人あまたさそひて、「いざ給へ、出雲をがみに。かいもちひめさせん」とて、具しもて行きたるに、各拜みて、ゆゆしく信おこしたり。御前なる獅子・こまいぬ、そむきて、うしろざまにたちたりければ、上人いみじく感じて、「あなめでたや、此の獅子のたち

心……………名詞
の……………助詞
まま……………名詞
に……………助詞
入り……………ラ四、連用
來る……………カ變、連體
事……………名詞
なし……………形容詞終止

【参考】
○胸のうち 人間の心は胸の中にあるものと昔の人は考へてゐた。心臓の名前はここから起る。今の人には自我の意識は脳髓の働きであると考へてゐる。
○鏡に色、かたちあらまし 鏡に色、かたちあらまし 心にぬしあらまし 鏡に色、かたちあらまし 心にぬしあらまし

胸のうちに若干のことは入りきたらざらまし(以上は本段にあるマシ) 今日來ずば明日は雪とぞ降りなまし。消えずはありとも、花と見マシヤ(古今)
海にて詠まシカば波立ちさへて入れずもあらんと詠まシを(土佐日記)

【参考】
○出雲 京都府南桑田郡千歳村字出雲に、今、國幣中社出雲神社がある。祭神は大國主命とその妃三穗津姫命といふ。
○獅子こまいぬ ここで、神社の拜殿などにおいてある木製の狛犬であつたに相違ない。元來神社の御前の獅子狛犬は惡鬼を避けるためにおいたのであつて、左方に獅子

やう、いとめづらし。ふかき故あらんと、涙ぐみて、「いかに殿ばら、殊勝の事は御覽じとがめすや。無下なり」といへば、各あやしみて、「誠に他にことなりけり。都のつとにかたらん」などいふに、上人なほゆかしがりて、おとなしく物知りぬべき顔したる神官をよびて、「此の御社の獅子のたてられやう、定めてならひあることに侍らん。ちと承はらばや」といはれければ、「其の事に候。さがなきわらはべどもの仕りける、奇怪に候ことなり」とて、さしよりて、すゑなほしていければ、上人の感涙いたづらになりになり。

【口譯】丹波の國に出雲といふ所がある。出雲の大社を勸請して立派な社殿ができてゐる（で、その出雲といふ土地は）志太の某とかいふ人が所領としてゐる土地なので、秋の頃に、聖海上人をはじめとして、その外にも人を澤山誘つて、「先づおいで下さい、出雲の神様を御參詣に。萩

（口を開く）右方に狛犬（口を閉づ）を置くのである。狛犬は高麗犬の義。徒然草百四十四段に、梅尾の上人、道を過ぎ給ひけるに、川にて馬洗ふ男、「あし、あし」と云ひければ、上人立留りて、「あな尊や。宿執開發の人かな。阿字阿字と唱ふるぞや。いかなる人の御馬ぞ。あまりに尊く覺ゆるは」と尋ね給ひければ、「府生殿の御馬に候」と答へけり。「こはめでたき事かな。阿字本不生にこそあなれ。うれしき結縁をもしつるかな」とて感涙を拭はれけるとぞ。

○同、第百五十二段に、西大寺靜念上人、腰かがまり眉白く、まことに徳長けたる有様にて内裏

の餅を御馳走致しませう」といふわけで、連れて行つたところが、めいめい參拜をとげて、非常に信仰の念を起したのであつた（さて、ふと氣がつくと）神社の寶前の唐獅子・狛犬が背中合せになつて、うしろ向きに起つてゐるので、聖海上人は、ひどく感激してしまつて、「ああ有難い事だ。此の唐獅子の立ちかたは、いかにも珍らしいことである。これには何か深い理由があるのだらう」と涙を浮かべて有難がり、「どうです諸君、この有難い事に氣がついて不思議に思はれませんか。さりとは、あんまりなことだ」といふからして、皆は不思議に思つて「ほんたうに、他所とは違つてをります。京都への土産にこの事を話しかせてやりませう」などと口口にいふので、上人はなほのこと、その由緒を知りたがつて、いかにも尤もらしく、物など識つてゐさうな顔つきをした神官を呼び、「此の御社の唐獅子のたてられかた、必ずや、いはれのあることとございませう。少しお話しをお聞きしたいものでございます」と仰しやうとしたところが「いや、これはこれは、いたづらな子供等がやりましたわい。けしからんこととございます」といつて、ちよいと近よつて（事もなげに）置きなほして、行つてしまつたからして（今迄、あれほど仰山に感激してゐた）上人の感激の涙が（何のために流したか分らなく）さつぱり無駄になつてしまつたのであつた。

へ參られたりけるを、西園寺内大臣殿「あな尊のけしきや」とて、信仰の氣色ありければ、養朝卿これを見て、「年の寄りたるに候」と申されけり。後日に、むく大のあさましく老いさらばひて毛はげたるを、引かせて、「このけしき、尊く見えて候」とて、内府へ參らせられたりけるとぞ。

○同、第百五十四段に、この人（爲兼大納言）、東寺の門に雨宿りせられたりけるに、かたは者どもの集り居たるが、手も足もねぢゆがみ打反りて、いづくも不具に異様なるを見て、「とりどりに類無き曲者なり。最も愛するに足れりと思ひて、目守り居ける程に、頓て其の興盡きて、見にくくいぶ

【摘解】 ○丹波—丹波國。今京都府の北部○出雲—今の京都府南桑田郡千歳村宇出雲のこと○大社—オホヤシロと讀んでよろしい。出雲の大社（大國主命を祀る官幣大社の事）を申す○うつして—出雲の大社の御神體を御分ちして移し奉ることをいふ。勸請すること○めでたく—有難く立派に○しだのなにがし—志太の某。傳記は分らない○とかや—とかいふ人○しる所—治めてゐる所。所領の地○聖海上人—傳記不明○人あまたさそひて—その他にも多くの人を誘ひあはせて○いざ給へ—さあいらつしやい○出雲をがみに—出雲神社をがみに。ここは「いざ、出雲をがみに（いらせ）給へ」の意である○かいかもちひ—萩の餅。牡丹餅○めさせん—召させん。さしあげませう○具しもて—引きつれて○ゆゆしく—由由しく。ひどく。えらく。この上なく○信おこしたり—信仰の念を起した○御前—神社のお前。寶前○獅子—唐獅子○こまいぬ—今日では獅子狛犬を一緒にして、單に狛犬といつてゐる。大抵の神社には、廣前に、石造の狛犬がおいてある○そむきて—互ひに背中合せになつて○うしろさま—うしろ向き○たちたりければ—狛犬がお互ひに廻れ右をして尻を向け合せて立つてゐるので○あなめでたや—ああ、有難いことだ。「めでたや」はここでは、有難いとか殊勝とかいふほどの意○ふかき故—ふかい仔細。何か深い理由があるのだから○意○殿ばら—複数の男子に對して呼びかけた二人稱代名詞○殊—勝—ありがたいの意○御覽じとがめずや—御覽になつて不審に思ひませんかの意。見とがめなさらぬか○無下なり—（これに氣がつかないとは）あんまりだの意○都のつと—都への土産○ゆかしがりて—奥床しがつて、何故か理由を聞きたが

せく覺えければ、「唯すなほに珍らしからぬには如かず」と思ひて、歸りて後、此の間植木を好みて異様に曲折あるを求めて、目を喜ばしめつるは、かのかたは者を愛するなり」と興無く覺えければ、鉢に植ゑられける木ども皆掘り棄てられけり。さもありぬべき事なり。○韓非子、外儲篇に「郢人、燕（國）の相、國に書を遺る者あり。夜、書く。火明らかならず、因つて燭を持つ者に謂つて曰く、「燭を擧げよ」と云ふ。而して過ちて「燭を擧げよ」と書す。燭を擧ぐるは書の意に非ざるなり。燕の相、書を受けて之を説いて曰く「燭を擧ぐとは明を尙ぶなり、明を尙ぶとは、賢を擧げて之に任ず

つて○おとなしく—ここでは尤もらしい意○物しりぬべき顔したる—物事を知つてゐるに相違ない顔をしたの意○たてられやう—立てていらつしやる有様の意○ならひ—習。いはれ、由緒○其の事に候—いや、それですがの意○さがなき—いたづらな○わらべども—子供達○奇怪に候—けしからん事です。とんでもないことです○さしよりて—狛犬のそばによつて○いにければ—（すました顔して）去つていつたのつ。

（第二百四十三段）

八つになりし年、父に問ひて曰く、「佛は如何なる物にか候らん」といふ。父が曰く、「佛には人のなりたるなり」と。又問ふ、「人は何として佛にはなり候やらん」と。父又、「佛のをしへによりてなるなり」とこたふ。又とふ、「教へ候ひける佛をば、なにが教へ候ひける」と。又答ふ、「それも又、さきの佛のをしへによりてなり給ふなり」と。又とふ、「其の教へはじめ候ひける第一の佛は、如何なる佛にか候ひける」といふ時、父、「空よりやふりけん、土よりやわきけん」といひて、わらふ。「問ひつめられてえ

るなり」と。燕の相、王に白す。王大いよるこび國以て治る。治は則ち治なり、書の意に非るなり。今や學者を擧げて多く此の類に似たり。

【参考】

○兼好法師は此の書中では自讃らしいことは言はない。それ故、この段も自慢にも八歳の時かくも哲學思想的であつたとは言つたのではあるまい。之が清少納言の枕草子の中にも有らば、自讃としか見られない。只何の氣無しに子供の時の事を回顧して書いたものであらう。「よしなしごとをそこはかとなく書き附け」たのであらう。

こたへずなり侍りつ」と、諸人にかたりて興じき。

【口譯】 自分(兼好法師)が入歳になつた時に、父に尋ねるには「佛様とはどういふ方でございませう」と。父が答へられて「佛様とは、人間がなつたものだ」と。又尋ねるには「人はどうして佛様になつたものでせうか」と。又、父が答へられて「佛様の教によつて佛様になつたのだ」と。又尋ねるには「教へなかつた佛様を、何が教へたのですか」と。又答へられて「それも亦、前の佛様の教によつて、お成りになつたのだ」と。又尋ねるには「その教へはじめなかつた最初の佛様は、どういふ佛様でございましたか」といつた時に、父は「天から降つたのだから、地から生じたのだらうか」と仰しやつて笑ひなかつた「問ひ詰められて、答へられなくなりました」と多くの人に話して面白がつてをられたことである。

【摘解】 ○父ト部兼顯といふ○佛は云云○子供心に、寺院へ行つて佛像を拜し、大人の言葉に「ほとけ」といふことを度度聞くので、子供にありがちな好奇的な疑問を起して、かう尋ねたのであらう○えこたへずなり侍りつー答へ得ずなつてしまひましたの意○諸人に語るー父か、兼好か。何れにも意を取られる。父が諸人に語つたと見ておく。

○史記の孟嘗君列傳第十五に「文(孟嘗君)問(閑)を受け、其の父の嬰に問うて曰く「子の子を何となす」と、曰く「孫と爲す」と、孫の孫を何とか爲す」と、曰く「玄孫と爲す」と、玄孫の孫を何とか爲す」と。曰く「知ること能はず」と。この段と同工である。誰しも少年の頃は知識欲が盛んで、かういふ問題を出すことが多いものである。

○雞は卵から生まれる故に雞は卵の子ともいはれる、其の卵は雞が生む故に卵は子ともいはれると西洋の話がある。これも此の話と同工のものである。さしもの徒然草の解義も之で終ることにした。

索引(發音順に排列)

あ

奇き眼……………一八六
關伽棚……………三三
明り障子……………一七
顯基中納言……………一四
あしがなへ……………九二
あぢきなし……………三・七一
飛鳥川……………五三
あせ……………五四
あだし野……………一五
案内……………三三
あなかしこ……………三六
尼御前……………八九
あめれ……………三六
怪しう……………二

あやしの……………二七
綾の小路……………三
あらがふ……………二〇
あらまし……………二〇
あらまほし……………六・一六
有り難き……………八九
ありく……………三三
蟻通しの神……………一八〇
ありなん……………六
あはれ……………三三
暗證の禪師……………一九六
案内……………三三

い

衣冠……………一六
勢猛に……………二
いさや……………三
礎……………五
いそぎ……………五・一九三
いたづがはし……………一三
いたましう……………一〇
一期……………一〇〇
一念……………二六
一人……………三
一錢……………二六・一三三
一鶴の争……………一五
いつはりの諺……………一九七・一九八・二〇〇
ゐて……………九三
いでや……………三
いとら……………四
絲による物……………三

う

いみじ……………九・二一・五・一六
芋頭……………一〇一
石清水……………九〇
牛賣りの話……………一六
うすものの表紙……………一五〇
歌屑……………三〇
うたて……………二
歌枕……………三
うつり……………一
孫……………四
うらなし……………二五

え

郢曲……………三
郢書燕説……………三四
穎川……………三六

惠遠……………一三六
 益軒の謙遜……………一四四
 えならず……………一九・八三
 榎の僧正……………八六

お

追風……………八五
 多かめれ……………三
 大路……………二八
 あふちの木……………七七
 大門……………五四
 公……………三三
 をかし……………三三
 小川……………三三
 をこがまし……………二七
 同じ心……………三三
 小野道風……………三三
 御佛名……………三三

折節……………三六
 懈怠……………二五
 貝に屬する字……………一四
 かいもちひ……………三三
 返りごと……………六四
 垣根……………四〇
 鱈魚論法……………二七
 下愚の性……………一八
 かけず……………八
 かけ樋……………三三
 かけもの……………三三
 下戸……………二〇
 かごと……………八六
 畏し……………三三
 かづく……………三三
 かたへの人……………三三

か

頑なる人……………一五二
 かたち……………八
 かちより……………六・九〇
 かつをの川柳……………一三
 たかうど……………一八
 鼎かぶりの話……………九
 かなで……………三三
 かばかり……………六四
 可不可……………六
 鵝毛……………一八
 蚊遣火……………四
 唐瓶子……………三三
 がり……………三三
 狩衣……………三三
 かりのやどり……………一六
 蛙の話……………九
 草堂……………三三
 土器……………三三

貫……………一〇二
 顔回……………一四二
 勸學文……………一五
 柑子の木……………三三
 肝心……………三三
 神無月……………三三
 堪能……………一七
 灌佛……………四一

き

驥……………一八
 北山太政大臣……………二二
 紀の貫之……………三〇
 木登りの話……………一七
 希望論……………一〇
 希有……………三三
 行願寺……………三三
 京極殿……………三三

曉蓮上人……………一五
 清水寺……………八
 虚妄……………一四
 清ら……………二
 きららか……………二七
 きりくひの僧正……………八
 きは……………一〇〇
 公明……………三三
 近習……………三三
 禁中……………三三
 金堂……………三三
 公世……………八七

く

水雞……………四
 くさめの話……………八七
 公事……………九
 九條殿……………三

くすし……………三三
 具足……………七
 口惜し……………八
 くらべ馬……………七
 栗栖野……………三

け

惠遠……………一三六
 穉康……………四
 けいめい……………一七
 希有……………三三
 けおさる……………八
 下戸……………二〇
 気色……………三
 気色だつ……………四〇
 外相……………一七
 懈怠……………三三
 げに……………五

こ

げにげにし……………六
 げに少しかこつ……………七
 下薦……………一三
 堅固……………一七
 兼好八歳時話……………三三
 源氏物語……………三三
 権者……………二二
 沅湘……………四
 阮籍……………一六

呉下の阿蒙……………一七
 小川……………三三
 極樂寺……………九
 ころろ……………一五
 心おとり……………八
 心にくし……………一七・一七
 心の色……………一六
 小坂殿……………二
 五條の御誓文……………一四
 木たち……………一七
 後徳大寺……………二〇
 詞書き……………一五〇
 異様……………一〇八
 こまいぬ……………三三
 虚妄……………一四
 これらの人……………三
 権者……………二二
 金堂……………五

と
 道心者……………二〇三
 道人……………一五五
 桃李……………五三
 梅尾の上人……………二三三
 時にあふ……………四・七三
 時の間の烟……………一九九
 時頼の川柳……………二〇七
 徳……………一四六
 所せき……………二二
 年比……………九〇
 徒然草……………一
 土大根……………一〇四
 舍人……………四
 ともある……………六八
 取り集め……………四三
 鳥部山……………一五

な
 内證……………一七六
 猶……………四
 なかご……………五二
 長月……………五五
 なかなか……………六
 名残……………四六
 などか……………八
 何阿彌陀佛……………二三
 名にこそ負へれ……………四〇
 なまめかし……………四
 ならましかば……………二四
 なりひさご……………三六

に
 荷前の使……………四三
 女房……………八五

ね
 仁和寺……………九〇
 猫また……………三三

の
 能……………一七二
 のがり……………三九
 のころ松……………三〇
 荷前の使……………四三
 後のわざ……………四九
 野宮……………五二
 野ら……………八六
 野分……………四三

は
 配所の月……………二四
 果敢なし……………五五

ひ
 日影……………四〇
 僻事……………二〇三
 ひがひが……………六四
 疋……………一〇三
 日ぐらし……………一
 ひじり……………一五五
 聖の御代……………二二
 秘藏……………二一〇

直垂……………二〇八
 ひたぶる……………六
 筆受……………一六
 悲田院……………一五
 人の鑑……………九
 人のがり……………六四・一五
 人の國……………二六
 一間……………一九
 白蓮の交……………一六
 拍子……………九
 便宜……………三

ふ
 風雲の思……………一六
 不堪……………一七
 不幸に……………三
 ふす猪の床……………七
 衾……………七

多
 多枯……………五

へ
 平氏の末路……………二〇三
 便宜……………三
 便利……………一五

ほ
 本意……………八
 坊……………八七
 法顯三藏……………一六
 反古……………七
 拍子……………九
 方丈記の一節……………一九
 法成寺……………四
 北條氏の系譜……………一八
 庖丁者……………二二

ま
 はふはふ……………二二
 訪問の話……………一八
 放埒……………一七
 北斗……………七〇
 法華……………一六
 法華堂……………五
 程こそあらめ……………二七
 程につけ……………四
 本意……………八
 本性……………八
 孫……………四
 まことしき文……………九
 松下禪尼……………一八
 松立て……………四
 松ども……………一三
 祭……………一六

み
 まどし……………七〇
 ままこ立て……………一六〇
 ままに……………一
 鞠……………一三九
 まれ人……………二二
 萬金……………二八

帝の御位……………三
 汀……………四
 御族……………五
 道人……………一三
 御堂殿……………五
 六月祓……………一
 南面……………八一
 御佛名……………四
 名利……………七〇
 名利の要……………七六

「研究社學生文庫」刊行趣意

新東亞建設の大任は懸つて次代國民の双肩にある。此れが爲め青年子弟の教育及び教養の擴充は體位の向上と共に全國民當面の重大問題である。研究社は年來英語英文學書出版の旁ら多數の圖書雜誌に據つて少青年の啓發教化に力めて來たが、茲に現前の國情に鑑み、且つ皇紀二千六百年の記念として更に此の事業の積極化を志し、「研究社學生文庫」を逐次刊行する。本文庫は自習本位と教養本位との二部より成る。前者は現行中等教科書と程度を同じくするが、在來の自習書・參考書が多く教科書の從屬的出版物に留まるに對し、進んで豊富該博なる知識を授け且つ學の根本を把握せしむる事を理想とし、此の爲め各學科を重要項目により分冊として現教育界の専門諸名家に擔當執筆を乞ひ、夫々獨立の講義たると共に、合すれば渾然たる一科の講義を成す方法を探つた。又教養本位の物は、類書が多く玉石混淆屢々子弟をして其の取捨に迷はしむるに鑑み、慎重精選に力め時には湮滅せる良著をも再刻する方針に出でた。而して兩者を通じて、讀者をして學問に對する興味を深め知識を徹底せしむるやう、力めて平明なる文體を用ひ、且つ必要に應じては多數清新なる説明圖を挿むこととした。斯くて本文庫は中等學校・青年學校の學生及び實業子弟の自習書・教養書として極めて適切且つ斬新であり、併せてよく現下の國情に適へるものたる事を確信する。願はくは諸賢、弊社が躍進日本の國運に寄與せんとする微意を諒とし、本文庫を博く活用し給はんことを。

皇紀二千六百年紀元節

小酒井五一郎

研究社學生文庫

修養

- (番號)
- 一〇一 教育勅語謹解 小野正康 定價郵税 五〇・六
 - 一〇二 明治天皇御製謹解 近刊
 - 一〇三 學生修身要領
 - 一〇四 修身講話一神 堀江時三 近刊
 - 一〇五 " 二佛 教 山下剛一 近刊
 - 一〇六 " 三儒 教 原了 近刊
 - 一〇七 " 四西洋倫理 伊藤榮四郎 近刊
 - 一〇八 " 五青少年學徒の生活 湯村惣太郎 三三・三

社會

- 二〇一 公民講話一 親と子・結婚・夫と妻 關田生吉 五〇・六

國語

- (番號) 雜島順
- 三〇一 國語學習法 定價郵税
 - 三〇二 國語讀本講話第一卷 近刊
 - 三〇三 國語讀本講話第二卷 近刊
 - 三〇四 國語讀本講話第三卷 近刊
 - 三〇五 國語讀本講話第四卷 近刊
 - 三〇六 國語讀本講話第五卷 近刊
 - 三〇七 東遊記・西遊記 栗本主税 近刊
 - 三〇八 雲萍雜誌・梅園叢書 木下忠明 近刊
 - 三〇九 常山紀談 手塚昇 五〇・六
 - 三〇〇 閑田文草 橋宗利 五〇・六
 - 三〇一 益軒十訓 松田幹夫 近刊
 - 三〇二 神皇正統記 阿部喜三男 五〇・六
 - 三〇三 折焚柴の記 英敏道 近刊
 - 三〇四 藩翰譜 岡泰彦 近刊
 - 三〇五 花月草紙 小野左恭 五〇・六

三六	菅笠日記	壬生勤	・五〇・六
三七	玉かつ	尾見修一	近刊
三八	鈴屋文集	若林爲三郎	近刊
三九	駿臺雜誌	壬生勤	近刊
四〇	近世女流雅文名篇	玉木退三	近刊
四一	近世雅文名篇	吉田辰次	近刊
四二	雨月物語・藤篋冊子	徳本正俊	近刊
四三	泊酒舍文藻・琴後集	長谷川敏正	近刊
四四	うけらが花・櫛園文集	英敏道	・五〇・六
四五	岡部日記・旅のなぐさ	河野孝光	近刊
四六	東關紀行・海道記	河野孝光	・五〇・六
四七	土佐日記・十六夜日記	徳本正俊	・五〇・六
四八	保元物語・平治物語	福村清	近刊
四九	平家物語	尾見修一	・五〇・六
五〇	太平記	渡邊茂	近刊
五一	十訓抄	長谷川敏正	・五〇・六
五二	大鏡	松田幹夫	・五〇・六

五三	增鏡	大島庄之助	近刊
五四	徒然草	大島庄之助	・五〇・六
五五	奥の細道・父終焉の記	玉木退三	・五〇・六
五六	鶉衣	若林爲三郎	・五〇・六
五七	古今和歌集	谷鼎	近刊
五八	新古今和歌集	阿部喜三男	近刊
五九	俳文選	田島賢亮	近刊
六〇	俳句選	田島賢亮	近刊
六一	俳文選	田島賢亮	近刊
六二	漢文學習法		近刊
六三	漢文讀本講話第一卷		近刊
六四	漢文讀本講話第二卷		近刊
六五	漢文讀本講話第三卷		近刊
六六	漢文讀本講話第四卷		近刊
六七	漢文讀本講話第五卷		近刊
六八	日本文外史	岡本優太郎	・五〇・六

三九	漢詩解	釋	大島庄之助	・五〇・六
四〇	孟論	子	木下忠明	・五〇・六
四一	大論	庸	栗田秀雄	近刊
四二	小學	學	淺尾芳之助	近刊
四三	正文章軌	範	龍澤良芳	近刊
四四	史記列傳	求	岡本優太郎	・五〇・六
四五	蒙叢	略	大島庄之助	・五〇・六
四六	言志四錄	山	山本文彦	・五〇・六
四七	十八史	小	小野左恭	近刊
四八	近古史談	吉	吉田辰次	・五〇・六
四九	先哲叢談・同後篇	山	山本文彦	近刊
五〇	言志四錄	山	山本文彦	・五〇・六
五一	言志四錄	山	山本文彦	・五〇・六
五二	言志四錄	山	山本文彦	・五〇・六
五三	言志四錄	山	山本文彦	・五〇・六
五四	言志四錄	山	山本文彦	・五〇・六
五五	言志四錄	山	山本文彦	・五〇・六
五六	言志四錄	山	山本文彦	・五〇・六
五七	言志四錄	山	山本文彦	・五〇・六
五八	言志四錄	山	山本文彦	・五〇・六
五九	言志四錄	山	山本文彦	・五〇・六
六〇	言志四錄	山	山本文彦	・五〇・六

四八	西洋史	一	上	古	中川一男	・五〇・六
四九	西洋史	二	中	古	成田喜英	近刊
五〇	西洋史	三	近	古	友納養徳	近刊
五一	西洋史	四	最近	世	橋本辰彦	近刊
五二	西洋史	五	最近	世	山本義夫	・五〇・六
五三	西洋史	六	現	代	山本義夫	・五〇・六
五四	東洋史	一	古	代	鎌田重雄	・五〇・六
五五	東洋史	二	中	古	山崎宏	近刊
五六	東洋史	三	近	古	有村政雄	近刊
五七	東洋史	四	近	世	淺海正三	・五〇・六
五八	東洋史	五	朝	鮮	有海正三	・五〇・六
五九	東洋史	六	滿	洲	八百谷孝保	近刊
六〇	東洋史	六	滿	洲	小島渡	近刊

四一	學生歷史要領	近刊	
四二	國史一國史通話	木代修一	近刊
四三	二古代	大高常彦	・五〇・六

四四	西洋史	一	上	古	中川一男	・五〇・六
四五	西洋史	二	中	古	成田喜英	近刊
四六	西洋史	三	近	古	友納養徳	近刊
四七	西洋史	四	最近	世	橋本辰彦	近刊
四八	西洋史	五	最近	世	山本義夫	・五〇・六

地理

(番號)

五〇一 學生地理要領

五〇二 日本地理

五〇三 " "

五〇四 " "

五〇五 " "

五〇六 " "

五〇七 " "

五〇八 外國地理

五〇九 " "

五〇〇 " "

五〇一 " "

五〇二 " "

定價郵稅

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

(番號)

五三〇 " 六 外國小地圖

五四 地理通論

五五 " 一 地勢・氣候

五五 " 二 産業・商業

五六 " 三 住民・交通・

五六 " 三 聚落・政治

六一 英語學

六二 英語の入門

六三 英語讀本講話

六四 英語讀本講話

六五 英語讀本講話

六六 英語讀本講話

六七 英語讀本講話

六八 英語讀本講話

六九 英語讀本講話

七〇 英語讀本講話

定價郵稅

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

(番號)

六一 英語讀本講話 五,上

六二 英語讀本講話 五,下

六三 英語讀本講話 五,下

六四 英語讀本講話 五,下

六五 英語讀本講話 五,下

六六 英語讀本講話 五,下

六七 英語讀本講話 五,下

六八 英語讀本講話 五,下

六九 英語讀本講話 五,下

七〇 英語讀本講話 五,下

七一 英語讀本講話 五,下

七二 英語讀本講話 五,下

七三 英語讀本講話 五,下

七四 英語讀本講話 五,下

七五 英語讀本講話 五,下

定價郵稅

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

外國語

(番號)

六一 英語讀本講話 五,上

六二 英語讀本講話 五,下

六三 英語讀本講話 五,下

六四 英語讀本講話 五,下

六五 英語讀本講話 五,下

定價郵稅

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

(番號)

六一 英語學

六二 英語の入門

六三 英語讀本講話

六四 英語讀本講話

六五 英語讀本講話

六六 英語讀本講話

六七 英語讀本講話

六八 英語讀本講話

六九 英語讀本講話

七〇 英語讀本講話

七一 英語讀本講話

七二 英語讀本講話

七三 英語讀本講話

七四 英語讀本講話

七五 英語讀本講話

七六 英語讀本講話

七七 英語讀本講話

七八 英語讀本講話

七九 英語讀本講話

八〇 英語讀本講話

八一 英語讀本講話

八二 英語讀本講話

八三 英語讀本講話

八四 英語讀本講話

八五 英語讀本講話

八六 英語讀本講話

八七 英語讀本講話

八八 英語讀本講話

八九 英語讀本講話

九〇 英語讀本講話

九一 英語讀本講話

九二 英語讀本講話

九三 英語讀本講話

九四 英語讀本講話

九五 英語讀本講話

九六 英語讀本講話

九七 英語讀本講話

九八 英語讀本講話

九九 英語讀本講話

一〇〇 英語讀本講話

定價郵稅

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

近刊

(番號)	1010	代數六	冪法と無理方程式	近刊	定價郵稅
	1011	"	七 比ト比例 下田虎美	・四〇・六	
	1012	"	八 指數計算と對數	近刊	
	1013	"	九 グラフ 佐藤輝實	・五〇・六	
	1014	"	〇 極大極小式 鈴木一郎	近刊	
	1015	"	二 級數 伊藤政治	・三〇・三	
	1016	幾何一	幾何入門 秋山武太郎	近刊	
	1017	"	二 直線圖形 福地喜雄	近刊	
	1018	"	三 圓 福地喜雄	近刊	
	1019	"	四 面積 松尾正夫	近刊	
	1020	"	五 比及比例 松尾正夫	近刊	
	1021	"	六 作圖題 小松直行	近刊	
	1022	"	七 軌跡 小松直行	近刊	
	1023	"	八 融合問題 小松直行	近刊	
	1024	"	九 立體幾何 伊藤政治	近刊	

(番號)	1105	三角	一般角・銳角 高見清	近刊	定價郵稅
	1102	學生博物要領	近刊		
	1103	植物一	構造と繁殖 松原益太	近刊	
	1103	"	二 植物の生活 日高盛春	近刊	
	1104	"	三 觀察と實驗 吉井清一郎	・五〇・六	
	1105	"	四 植物の應用 山口俊策	・四〇・六	
	1101	動物一	無脊椎動物 福井玉夫	・五〇・六	
	1101	"	二 脊椎動物 高島春雄	・五〇・六	
	1103	"	三 動物の生活 瀧庸	近刊	
	1104	"	四 採集と研究 高橋敬三	・五〇・六	
	1101	鑛物一	鑛物と岩石 松山確郎	近刊	
	1102	"	二 我等の住む大地 鹿沼茂三郎	近刊	
	1103	"	三 地球發達の歴史 東福寺篤	近刊	
	1104	"	四 化石 安田健之介	近刊	

(番號)	1401	生理	日常の生理學 杉靖三郎	近刊	定價郵稅
	1402	衛生	日常の衛生學 杉靖三郎	近刊	
	1501	學生物理・化學要領	近刊		
	1502	物理一	物理通話 土井不曇	近刊	
	1503	"	二 音と物性 水野國太郎	近刊	
	1504	"	三 熱 山田良民	・三〇・三	
	1505	"	四 光 内藤卯三郎	・五〇・六	
	1506	"	五 電氣と磁氣 荒木源太郎	近刊	
	1507	"	六 原子物理 藤岡由夫	近刊	
	1601	化學一	化學通話 飯島俊一郎	・五〇・六	
	1602	"	二 非金屬化學 武原熊吉	近刊	
	1603	"	三 金屬化學 武谷琢美	近刊	
	1604	"	四 有機化學 石川清一	近刊	
	1605	"	五 無機應用化學 石井賴三	・四〇・六	
	1606	"	六 有機應用化學 三羽忠廣	・四〇・六	

(番號)	1401	圖	畫一 板倉贊治	近刊	定價郵稅
	1402	圖	畫二 板倉贊治	近刊	
	1501	體育	健康教育 廣井家太	近刊	

394
323

終



¥.50